みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# モンゴルにおけるウマ，ウシ，ヒツジの搾乳儀礼：祝詞にもとづく再構成の試み



| メタデータ | 言語: ja<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 小長谷, 有紀<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00004261 |

# モンゴルにおけるウマ，ウシ，ヒツジの搾乳儀礼
## ——祝詞にもとづく再構成の試み——

小長谷　有　紀*

# Milking Ritual of Mares, Cows and Ewes in Mongolia

Yuki KONAGAYA

The ritual of milking is one of the most important components of Mongolian pastoral culture. If we can make clear the meaning of that ritual, we can underdtand an important aspect of Mongolian pastoralism. Nowadays in Mongolia the milking rituals do not exist. But by reading and analyzing Mongolian prayers and the coments on them, we can reconstruct the milking rituals.

The ceremony to declare the opening of the milking season is known as the ritual called "*ürs gargax yos*" in Mongolian language, which means "the ritual of getting seeds". Why is the ritual of getting "milk" called the ritual of getting "seeds" ? Is milk the symbol of seeds ?

At the ceremony people blessed not all of mares' milk, but just the milk of mares which have just given birth for the first time. So we can understand that people celebrate the beginning of birth or the coming to maturity of those mares. That is the more important meaning of this ritual than the opening of the mares' milk season.

In the case of cows and ewes, the words and sentences of the prayers are very similar to those for mares. And in some prayers the speakers declare that they bless the milk of cows which have just given birth for the first time. So clearly the main purpose of the rituals of the milking of cows and ewes is the same as the ritual of the milking of mares.

While there is another type of milking ritual for ewes, the purpose of the Mongolian milking ritual called "*ürs gargax yos*" is the praying for reproduction. And the word *ürs*, that is seeds, represents descendants.

* 国立民族学博物館第1研究部

**Key Words :** Mongol, milking rites, mare's milk, reproduction, pastoral system
キーワード：モンゴル，搾乳儀礼，馬乳酒，増殖，牧畜体系

By means of these rituals people pray for the increase of domestic animals. This main purpose of milking rituals in Mongolia may be entirely different from that of similar rituals in the Mediterranean region.

1. はじめに
2. ウマの搾乳儀礼
（1）ウマの搾乳作業
（2）儀礼における手続き
（3）儀礼における祝詞
3. ウシの搾乳儀礼
（1）ウシの搾乳作業
（2）儀礼における手続き
（3）儀礼における祝詞
4. ヒツジの搾乳儀礼
（1）ヒツジの搾乳作業
（2）儀礼における手続き
（3）儀礼における祝詞
（4）もう一つの搾乳儀礼
5. さいごに

## 1. はじめに

一般に，搾乳は，牧畜を成立させた画期的な二大技術の一つとして，去勢とともに重視されている [梅棹　1965: 75–78]。それゆえに，搾乳をめぐる技術的な側面は，牧畜文化の重要な構成要素として，しばしば考察の対象とされてきた。モンゴルに関しても，搾乳およびそれに連続する乳加工について技術的な側面の研究は蓄積されている。

たとえば，生態人類学的立場にたった梅棹の一連の研究 [梅棹　1950, 1951, 1952, 1955] があり，これらに対して言語学的な視点からの検討も試みられた [田中　1977]。さらに，これら両者における研究対象地域の違いを考慮しながら，両者の視点の違いを整合しようという検討も試みられた [利光　1984]。また，技術開発や技術援助という立場にたった，乳製品の化学的分析も累積している [中江　1976, 1977; 越智 1991a, 1991b; Accolas et Aubin　1975]。

こうした技術的側面に関する研究にくらべると，搾乳にともなう儀礼に関する研究は，決してすすんでいるとはいえない。搾乳は牧畜を成立せしめている重要な技術であるだけに，それにともなう儀礼もまた，充分に考察されてしかるべきであろう。

これまでのところ，モンゴルにおける乳をめぐる儀礼といえば，もっぱらウマの乳をもちいる儀礼が注目を集めてきた。13世紀のモンゴル帝国の様子をかいまみたマルコ・ポーロやルブルクの記録にも登場している。たとえば，マルコ・ポーロは夏の宮

殿である上都開平府について記述する際に，星占師らによる「毎年陰暦8月28日を期して白馬の乳を地上と空中に散布し，もろもろの精霊に供養されよ。精霊にこの馬乳を供養さえすれば，彼らはきっとカーンの所有するすべてのもの，すなわち男女を問わずいっさいの人間・家畜・鳥獣・穀物そのほかあらゆるものを保護するであろう」という進言にしたがって，祭りをとりおこなうために上都をこの日に出発するのだと記している [ポーロ 1970: 172]。また，ルブルクは「5月9日には，占者たちは家畜群から白い牝馬を全部集めて聖別します。キリスト教の司祭たちも提香炉を持ってそこへ集まらなくてはなりません。それから，新しいコスモス酒（馬乳酒）を地面にまきちらし，その日は非常な御馳走をいたします」と，記録している [ドーソン 1965: 281]。これらの記述にみられるような馬乳を散布する儀礼では，儀礼の対象が白馬に限られており，またカーンたちが主催する政治的な儀礼となっている。政治的な儀礼であるがゆえに歴史学の立場からもはやくから注目されてきた [ドーソン 1971: 179など] といえよう。政治的な文脈をあたえられたこうした儀礼をよりふかく理解するためにも，民間において生業とより密接に結びついてきた儀礼を考察しておくことは重要であろう。搾乳という牧畜上の作業と連動して実施される儀礼を，生業儀礼としてとらえ，本稿ではこれを「搾乳儀礼」とよんで考察の対象とする。

ただし，現在では搾乳作業にともなう儀礼はほとんどおこなわれていない [SAMPILDENDEV 1985: 42]。これまでに残されたわずかな文献資料に依存するほかない[1)]。モンゴル各地で収集された口承文芸は，しばしば儀礼に関連する祝詞を収録していた [RINTCHEN 1959; XORLOO 1966; DAMDYNSUREN 1959; GAADAMBA and TSERENSODNOM 1967; SAMPILDENDEV 1985, 1987]。こうした口承文芸の資料が，そこに付された若干の説明とともに，民族誌的にきわめて貴重な資料を提供してくれる。本稿では，これまでに口承文芸として収集された祝詞などの分析を通じて，モンゴルにおける搾乳儀礼を再構成したい。なお，ここであつかう口承文芸資料は，いずれもモンゴル人民共和国から刊行されたものであり，ほとんどモンゴル人民共和国のデータである。ただし，一部に中国内蒙古自治区の情報をふくむものがあり，そのような資料をあつかう場合には本文で注記することとする。

口承文芸資料を素材として，すでに文学的立場からもウマの搾乳儀礼は注目されていた。そのうち，いくつかの祝詞については精密な翻訳がほどこされた [SERRUYS

1) ボブスグル湖周辺にすむダルハト族に関するエスノグラフィーは，多様な儀礼の状況を記述しているにもかかわらず，搾乳儀礼に言及していない [BADAMXATAN 1965]。わずかに，後述する Sodonom が記憶の中の儀礼を記しとどめている [SODONOM 1965]。

1974]。また翻訳とともに搾乳儀礼を紹介したものもある [蓮見 1979; HUMPHREY 1981][2]。しかしながら，充分な理解がゆきとどいたとは思われない。たとえば，その儀礼の名称という基本的事項についても，以下のように見解がわかれている。

モンゴルにおいて，乳をめぐる儀礼として「ウルス・ガルガハ・ヨス *ürs gargax yos*」という民俗語彙がよく知られている。「ウルス」とは種を意味する名詞ウルの複数形であり，たとえば「ウル・タリフ *ür tarix*」で種を植える，すなわち「播種」を意味する。こうした種や果実の意味から派生して，「ウル・ドゥン *ür dün*」という連語によって「成果，結果」を意味することもある。儀礼をさす「ウルス・ガルガハ・ヨス」は，直訳すると「種（複数）を・出す・しきたり」となる。この「ウルス（種）」とは，一般に「スー（乳）」のことであるとみなされている [SAMPILDENDEV 1987: 54; NIYAMBUU 1976: 72]。儀礼において実際には「乳をとりだす」ことから，そのような一般的理解がもたらされたのであろう。これに対して，やや古い民族誌的記述に依拠しようとする Humphrey は，ウルスを「子孫」の意味であると解釈している [HUMPHREY 1981: 78]。たしかに，ウルには一方で子孫や幼児を意味する語彙が存在する。たとえば「孫」の意である語彙アチ *aci* と連語にして，「アチ・ウル」といえばまさに「子孫」を意味する。実際には「乳を出す」作業にともなう儀礼的行為が，なぜ「乳を出すしきたり」とよばれずに，子孫を意味する語彙をもちいて「種（複数）を出すしきたり」とよばれるのであろうか。儀礼の総体をしめす名称であるだけに本質的な問題がかくされているように思われる。にもかかわらず，これまでほとんど議論されてこなかったのである。

このような論点を明らかにしていくうえで，搾乳儀礼をウマに限定することなく，他の家畜も考察対象にふくめることが必要であろう。なぜなら，「ウルス・ガルガハ・ヨス」は，ウマの搾乳儀礼をさすことが多いからである。ウマ以外の場合には同様によばれる場合もあるが簡単に「ツァツァル *cacal*」あるいは「サツァル *sacal*」とよばれることも多い。これまでもっぱら重視されてきたウマの搾乳儀礼には，なんらかの特殊性がそなわっているものと考えられる。そして，そのような特殊性は，他の家畜の場合との比較によって初めて明らかとなるにちがいない。

ところで，ツァツァルとは，乳を大地にふりまくという儀礼的行為をさす。伝統的には九つの穴のあいた，「ツァツァル」（古い縦文字のつづりでは *saculi*）とよばれる木製の匙が使用されてきた（図1参照）[TAUBE 1983: 70]。匙を一度ふりあげるこ

2）ウマの利用に焦点をあてて，そのなかで搾乳も考察するという視座をもつものもある [内田 1987; AUBIN 1986]。

とによって9滴ふりまくことになる。これをもちいて天地にむかって乳をふりまく行為は，搾乳の儀礼ばかりでなく，多様な場面で実施される。たとえば，男を戦地に送り出すなどの別離の時に，家人が乳を大地にふりまいて無事を祈る。つまり，ツァツァルとは，搾乳儀礼という特定の儀礼に限らず，より一般的な儀礼的行為である。先にのべたマルコ・ポーロの記述する儀礼でもツァツァルをふくんでいるし，後述するようにウマやその他の家畜の搾乳儀礼においても，ツァツァルの行為は実行される。本稿は，広義のツァツァル一般を考察対象とするものではなく，ツァツァルをも構成要素としてふくみもった搾乳儀礼を対象とするものである。

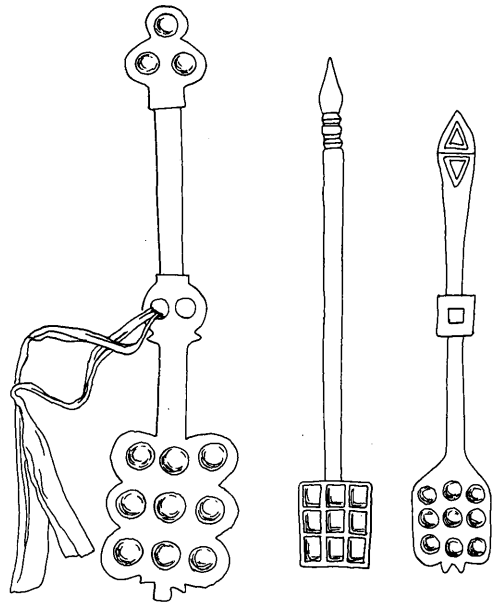

**図1**　ツァツァルとよばれる儀礼用の木製匙
(Taube　[1983] より)

これまでウマにかたよりすぎてきた研究状況をふまえながら，本稿では，他の家畜種を考察にくわえて比較しつつ，モンゴルにおける搾乳儀礼の全体像を把握したいと考える。ウマの乳をもちいる儀礼は，たしかに政治的な儀礼にくみこまれるという重要性をもっている。ウマの乳をもちいた儀礼や，ウマの搾乳儀礼について考察を深めるうえでも，他の家畜の場合の搾乳儀礼を視野にいれておく必要があるだろう。また，家畜種相互の比較によって初めて，家畜種をこえて搾乳儀礼全体に共通するモンゴル的な特徴を明らかにすることもできよう。さらにまた，家畜種間に共通するモンゴルの特徴を，他の牧畜文化圏と比較する道もひらかれよう。

ウマやウシやヒツジそれぞれの搾乳儀礼において，いかなる行為が実践され，何がどのように語られているのだろうか。家畜種ごとによって何が異なり，何が共通しているのだろうか。儀礼における行為と祝詞などを手がかりにして，搾乳をめぐる行動様式あるいはその背景にひそむ思考様式について考察してゆく。なお，ラクダについては資料不足のため考察しえなかった[3]。このような制限があるものの，家畜種相互の類似と相違とを明らかにし，モンゴルの多様な様相を把握することはできる

であろう。

## 2. ウマの搾乳儀礼

### (1) ウマの搾乳作業

ウマは，その利用について他の家畜と比較すると明瞭になるように（表1参照），もっぱら乗用としてきわだった家畜であるが，他の家畜とともに搾乳の対象にもなる。ウマの場合，交尾期が人為的にコントロールされていないので，出産時期にばらつきがみられる。その点はウシと同様であるにもかかわらず，搾乳はウシのようにばらばらに開始されずに，ヒツジのようにいっせいに開始される（表2参照）。これは，馬乳の特異的な化学的性質とも密接に関係している。

馬乳は，他の家畜の乳と異なって，撹拌によって乳脂肪を分離することができないために，各種の乳製品を加工することができず，ただ馬乳酒にのみ加工される［チムドドルジ　1989］。この馬乳酒は，長期保存がきかないので一時的に消費されるしか

**表1**　家畜の多様な利用

| | 交通・運輸 | | | 食用 | | 衣および住 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | *7 | |
| | 乗用 | 牽引 | 積載 | 搾乳 | 屠殺 | 毛 | 毛皮 |
| ヒツジ | — | — | — | ○ | ◎ | ◎*5 | ◎ |
| ヤギ | — | — | — | ○ | △*3 | ◎ | ◎ |
| ウシ | — | ◎ | — | ◎ | ○ | ○*6 | ○ |
| ウマ | ◎ | ○ | △*2 | ○ | △*4 | ○*6 | ○ |
| ラクダ | ○*1 | ○*1 | ◎ | ○ | △*4 | ◎ | — |

*1：冬季に利用する
2：狩の獲物などをかける程度
3：特別に石焼き料理とする
4：減少しつつある
5：フェルトは家屋に利用する
6：尾・たてがみを縄にする
7：そのうちの殺さない利用方法

3）ラクダ放牧がさかんなことで有名なアラシャン地方には，「ウルスン・ナイル *ursun nair*」すなわち「ウルスの祭り」という名の祭典がもよおされる［Sonjab and Sucinbilig 1989: 269–309］。しかし，搾乳との関連や，とくにラクダとの関係をみいだすことはできない。

ない。また，一回の搾乳によって一頭から搾れる量は300ccほどで少なく，一日に7回などと頻繁に搾乳する必要がある。こうした生物的条件および化学的条件を背景に，まとまった頭数を一時期に集中して搾乳し，まとめて消費するのである。

**表2**　季節的集中度

| | 家畜の出産状況 | 搾乳作業の状況 |
|---|---|---|
| ヒツジ | 集中タイプ | 集中タイプ |
| ウ　シ | 拡散タイプ | 拡散タイプ |
| ウ　マ | 拡散タイプ | 集中タイプ |

ウマの搾乳は現在もおこなわれている。その期間は通常，7月から8月にかけての2ヶ月ほどに限られる。まず，搾乳を開始するにあたって，家の前に2本の杭をうち，その間に「ゼル　*jel*」とよばれる綱を地面に這わせるよう張る。メスウマよりも先にまず子ウマを馬捕り竿でひっかけてとらえ，ゼルにゆわえておく（写真1参照）。それから，その子の母をつかまえるという手順をとる。いったん捕捉された母ウマは，自発的にゼルの周辺にいて子ウマのそばを一日中離れないといわれている。少なくとも遠くへ行ってしまうことはない。こうして子ウマをおとりのようにして一日に何度も搾乳する。その日の最後の搾乳が終わった時点で，子ウマは綱から解放され，母ウマとともに群れとしてまとまりつつ，宿営地からやや離れたところへと追われる。そして，翌朝ふたたび子ウマから順次捕捉される。

このように，ウマの搾乳には手間がかかる。また，数頭のメスが出産するほどの馬群を所有していなければ，乳量を確保できない。すなわち，富裕でかつ労働力に余裕

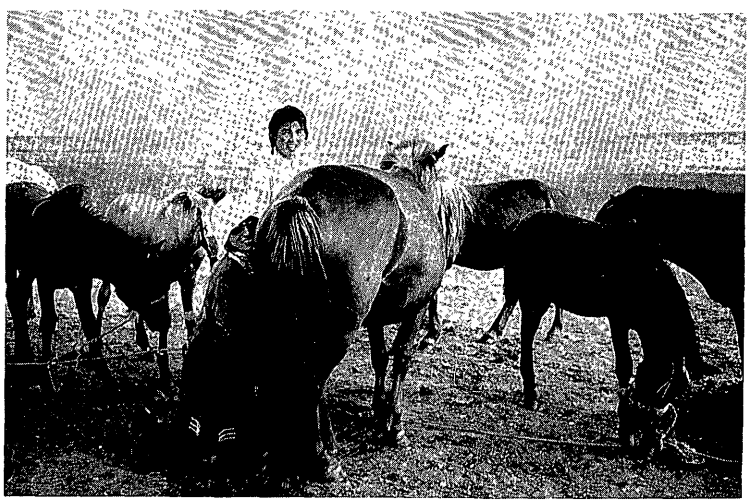

**写真1**　ウマの搾乳

のある牧戸でなければ，なかなか毎年ウマの搾乳を実施することはできない。

搾乳にあたっては，まず子ウマに哺乳させるという，いわゆる催乳（＝suckling）をおこなってから，子ウマをひきはなして搾乳する。搾乳は，ウシとちがって家畜個体の左側からアプローチされる。この左側は，乗馬のときにアプローチする側でもあり，ウマに対するあらゆるアプローチの際の「正しい側」とされている。かならず，搾乳者以外にもう一人が介添し，子ウマをひきはなすとともに，しばしば「グレー，グレー」などと声をかける。このかけ声は，母ウマをなだめるのだと理解されている。

このようなウマの搾乳が開始される頃に，「ウルス・ガルガハ・ヨス」とよばれる儀礼がおこなわれてきた。1940年代まで実施されていたという [Sodonom　1965: 30]。実施時期については，5月末，旧暦4月（新暦5月頃），旧暦5月（新暦6月頃）などのばらつきがみられる。地域差もさることながら，年ごとの植生状況に応じるために，日時が固定される必要はないのである。ただし，儀礼に潜在する意味を考察するうえで，どのような「とき」として認識されているかは重要であろう。

これについて，初めて搾乳するときと，初めて馬乳酒ができるときとの二つがあるといわれている [Humphrey　1981: 78;　Niyambuu　1976: 72]。実際には，後者の「初めて馬乳酒ができるとき」が選択された可能性が高い。なぜなら，もし前者の場合すなわち搾乳開始にあたって儀礼をおこなうのであれば，そのときにはまだ馬乳酒ができていないので，人々にふるまうべき酒がまだ用意できていないことになるからである。馬乳酒は薬効成分をふくむ貴重な食品で，この飲用は静養療法ともなっており [小長谷　1991c]，このような馬乳酒を味わうことはまさに祭りにふさわしい。実質的に娯楽的な内容を儀礼にもりこんで祝祭化を可能にするからこそ，「馬乳酒を初めて味わうとき」が儀礼化の契機となりやすいのであろう。

こうした状況は，一見すると，一般に農耕社会でみられる収穫儀礼と同様であり，収穫時の初物を神や祖霊などにささげる儀礼的行為と非常に類似しているようにみえる。このような儀礼化の契機をになっている「初物」を重視するならば，すでに加工されたものを「初めて味わうとき」と「初めて搾るとき」とは，それほど厳密に区別する必要はあるまい。これまで峻別されてきたのは，「搾乳シーズンの開始」と「馬乳酒シーズンの開始」でしかなく，いずれにせよ，一年間の生業暦のなかにうめこまれた収穫儀礼に相当するような「シーズンとしての開始」を儀礼の契機として設定してきたにすぎない。

たしかに，「その年の初搾り」という儀礼化の契機は，ウマの搾乳をやめるときの儀礼的行為と対をなしているという点で重要である。ウマの搾乳をいっせいに始めた

なら，いっせいに止めるときがやがて来る。そして，馬乳酒のシーズンも終了する。この終了作業は「グー・タビフ *güü tabix*（メスウマを・解放する）」あるいは「オナガ・タビフ *unaga tabix*（子ウマを・解放する）」とよばれ，祝詞などをのべるなどの儀礼的行為をともなう [SAMPILDENDEV 1987: 108; ARIYASUREN 1991: 69]。終了行為と対になっていることは，開始行為が「グー・バリフ *güü barix*（メスウマを・捕まえる）」という特定の語彙でよばれ，まさに対をなした表現であることからも理解しやすい[4]。

以上のように，ウマの搾乳儀礼の契機として搾乳作業の開始を重視すると，それは搾乳シーズンあるいは馬乳酒のシーズン到来を意味し，それがシーズンである以上，終わりの切れ目をともなうものになってくる。搾乳シーズンあるいは馬乳酒のシーズンの区切りを意味するにふさわしい用語としては，「グー・バリフ」「グー・タビフ」の対句が存在する。「グー・バリフ」とは，ウマの搾乳にかかわる具体的作業を表現した名称であって，ひいては搾乳シーズンの開始を意味しうる。一方「ウルス・ガルガハ・ヨス（種を・出す・しきたり）」という名称は，ウマの搾乳作業と直接かかわる語彙ではなく，儀礼の意味内容をおそらく反映しているにちがいない。

ではいったい，「種を出すしきたり」という名称に対してよりふさわしい意味内容とうものがあるのだろうか。搾乳シーズンひいては馬乳酒シーズンの区切りをつける以外に，儀礼化の契機となりうるものがあるのだろうか。儀礼における行為から考察をすすめる。

## （2）儀礼における手続き

ウマの搾乳儀礼「ウルス・ガルガハ・ヨス」は，ゼル（綱）の祝福など一連の儀礼的行為からなっており [HUMPHREY 1981: 78]，その一つに「オーガン・オナガ *uugan unaga*（初子・一歳馬）」の祝福があった。オーガンとは，人や家畜に対してもちいられ，長子すなわち初子を意味する[5]。ウマの搾乳にあたって，メスウマよりも先にまず子ウマたちがつかまえられるが，搾乳儀礼の際に限って，子ウマたちのなか

4）グー・バリフの語について，Humphrey は本来は出産の意味であるという解釈を試みているが，そのような解釈は不要であるばかりか，誤りである可能性も高い。メスウマを「捉える（バリフ）」作業と「放す（タビフ）」作業との対は，きわめて素直に了解できる対句的な表現である。

5）オーガンは，初子と翻訳することもできる。ただ，初子という言葉には，もう一つの解釈が可能である。「それぞれの個体にとっての初子」ではなく，「群れ全体においてある年に最初に生まれた子」という意味にもなりうる。たとえば，西ウジムチン旗における筆者の調査では，こうした子ウシにのみ鈴をつける風習がみられ，たしかにそのような存在もマーキングされていることは確実である。また，そのような子畜に対して「群れの先達となれかし」↗

でも最初に初子である子ウマたちが捕捉された。そして，その首にハダク *xadag*（薄くて細長い絹布）がむすばれ，ゼル（地面をはう綱）の始端（上側とみなされているほう，西もしくは高所にあるほう）にゆわえられた。この始端の付近に，祭りのための宴席がもうけられた。大きな馬群であれば，そのようなあつかいをうける初子は何頭も存在したであろう。地方によっては，通常は乗用しないことになっている種オスウマに乗って，初子ウマをつかまえたともいう [SODONOM 1965: 31][6]。

ほかの子ウマたちもいるなかで，特定のあつかいをうけ，意味づけされる初子ウマたちが存在していることは，きわめて重要である。初子であること，言い換えればそれらの母たちが初産であることが，儀礼化の契機をになっていると推測されよう。「初産」とは，個体にとっての「出産開始」を意味し，同時に個体にとっての「搾乳開始」を意味している。一般に，シーズンとしての搾乳開始の祭りといわれる儀礼において，じつは『家畜個体にとっての「搾乳の開始」』こそが重要な意味をもっていると考えられる。

モンゴル語資料の多くが依拠してきたという意味で原典ともいえる Sodonom の資料によれば，子ウマが捕捉されてから以後の式次第は，おおよそ次のようなものである。ゼル（綱）の両端で，小石をつみあげたオボをつくり，そこでラマが香をたく。ゼルの始端（＝上端）付近に，フェルトを敷いて「ボムサン *bomsang*」とよばれる経をよみあげる。つづいて「エフニー・グー *eknii güü*（はじめの・メスウマ）」を男が搾乳する。牧戸によっては，「エフニー・サーム *eknii saam*（はじめの・しぼり）」あるいは「エフニー・ゴルバン・サーム *eknii gurban saam*（はじめの・三つの・しぼ

↘ と祝福する習慣もある [ODBAGMAD 1986: 152; SAMPILDENDEV 1985: 19]。このように祝福される子は，一般に「（群れの）最初の子」といわれるが，「オーガン（長子）」とよばれることもある。

蓮見は，現代的にアレンジされている儀礼の記述 [NIYAMBUU 1976] に依拠しており，それによれば，群れの中で最初に生まれた子ウマをつかまえる，と解説している [蓮見 1979: 119]。

しかしながら，オーガン・オナガ（初子・一歳馬）という場合には，あるメスウマから最初に生まれた子ウマをさすのが普通である。混乱をさけるために，以下の本文では，このような個体についてのみ初子とよび，群れのなかで最初に生まれた子については初子とはよばない。

6）通常，種オスウマには騎乗しないので，その意味で儀礼的な行動である。これに関連して，一種の映像資料として，有名な画家 Sharav (1869–1939) の作とつたえられる「ウルス・ガルガジ・バイガー・ン *urs gargaj baigaa ni*（ウルスを出しているところ）」という絵画がある。この絵の中央には，種オスウマを馬捕り竿でつかまえているシーンがえがかれており [TSULTEM 1986: 161–165]，「これは，その年のオーガン・オナガ（初子ウマ）の父に相当する家畜に乗って，その子ウマを捕捉する習慣をあらわしている」という [DASHNIYAM 1977: 47]。種オスウマが重視されること，さらに父と子という血統関係が儀礼的行動のなかにうめこまれていることが了解される。出産という母性の立場からだけではなく，父性原理もそなえた増殖儀礼である，といえるのではないだろうか。

り)」をしてから，それらの乳をもちいて天地に散布する。

男がウマの乳をしぼるという習慣は，『元朝秘史』にみられる [元朝秘史巻 2-90段（村上訳 1970: 141)]。今日ではウマをふくめてすべての家畜種を一般に女性が搾乳するが，搾乳儀礼では，古い習慣が復元されているようである。このように，搾乳儀礼の場合，一般的な搾乳とは異なった手続きをもつ儀礼的な搾乳が実施されるのである。

儀礼的搾乳においては，「はじめの」メスウマが重視されているが，ここでいうはじめとは，ゼルのはじめすなわち綱の上端をさしている。上端から子ウマをゆわえていくから，上端にいる子ウマたちは，最初のほうにゆわえられたもので，すなわち初子である。もちろん，そこにつれてこられて搾乳されるのは，初産メスということになる。そのような「上端の一頭」もしくは「上端から三頭めまで」を搾乳してから，その乳をふりまくのである。儀礼的搾乳の対象が，初産メスだけであることは，もはや明らかであろう。

儀礼において，実際に搾乳されるのは，初産メスだけに限らない。初子以外の子ウマは順不同に捕捉されるとあるから [Sodonom 1965: 31]，乳の出ているメス全体が搾乳され，乳量が確保されるものと思われる。不足の際には他のメスウマも搾乳されるという説明をしているものもある [Humphrey 1981: 79][7]。儀礼の際に実際に搾乳されるのは初産メスだけではないが，儀礼的な搾乳の対象として認識され，天地にふりまく乳を供給するのは，ゼルの上端にかたよっている初産メスたちに特定されているのである。

それではなぜ，『家畜個体にとっての「搾乳の開始」』が，儀礼化されるほど重要な意味をもつのであろうか。

搾乳儀礼では，「ヒシギン・ホビン *kisigin xobin*（恵みの・桶)」とよばれる特製の桶が利用され，これにはウマをおとなしくする力があるとみなされている。したがって，将来にわたって搾乳しやすいおとなしい家畜にするための呪術的手続きとして搾乳儀礼をとらえることもできる [Humphrey 1981: 80]。たしかに，初子と初産メスはともにこれまで人による搾乳作業を経験したことがなく，もし搾乳時にあばれたり

7) Humphrey はここで，さらに搾乳するウマのことを 'a mare which has foaled earlier' と表現している。つまり，「もっと以前から出産をしてきた一頭のメスウマ」という意味にとれると同時に，「すでに出産した一頭のメスウマ」という意味ともとれる。乳をもつメスでなければならないから，「すでに出産したメスウマ」という意味であると解釈してもまちがいはないだろうが，より重要なことは「昨年などもっと以前から出産をしてきたメスウマ」であることであって，出産の時期が問題なのではない。一頭という限定詞も不要であるように思われるし，全体として不分明な表現になっていることは免れまい。

すると危険である。将来にわたってずっとおとなしくて搾りやすい家畜になるために，最初の経験は重要であろう。搾乳作業をめぐって将来にわたる呪術的な効果を期待しているという側面も充分あると思われる [小長谷　1991b: 227]。しかし，それではなぜ「ウルス・ガルガハ・ヨス」などという表現が選択されてきたのかをうまく説明することはできない。すでに Humphrey は，儀礼の祝詞などからこの儀礼の意味を増殖祈願にあるとみて，ウルスという語彙の意味を子孫として理解していたが，一方で初産ゆえに慎重に搾乳すべきであるための儀礼を強調しており，かならずしも納得できる解釈を提示しているとはいえない。多義的な儀礼であるから一貫した説明は不要であるとみなしてもなお，搾乳作業にかかわる儀礼を「種を出す」と形容することの意味は依然として十分説明されえないまま残されよう。むしろ単純に，初産だからこそ今後の出産すなわち増殖・繁殖・繁栄などが期待され，「子孫を出す」ことが祈願されるのだと考えてよいであろう。

本来は初産メスの儀礼的搾乳であった「ウルス・ガルガハ・ヨス」も，実際には，他の経産メスも同時につかまえられて同時に搾乳され，搾乳開始「グー・バリフ」を画する儀礼的行為と同時並行して実施されることになる。そのために解釈上の混乱が生じ，儀礼における初産の重要性が等閑視されることになったのであろうという推測がなりたつ。

さらに見逃すことができないのは，搾乳儀礼のなかに，搾乳作業と関係するとは思われない儀礼的行為がふくまれている点である。Sodonom は，乳をふりまく前に，この儀礼のためにほふったヒツジの右肩の四つの長い肋骨と，右腿のくるぶしつきの髄をゼルの終端（＝下端）でもやすこと，これが「ウルス・ヒーフ *urs xiix*（種を・する）」[8] とよばれることを記録していた。このあとで九頭の白馬が用意され，家長をはじめとして乗馬した人たちが馬乳酒をまず味わい，ゼル（綱）のまわりをまわるなどの行為を遂行したのちに儀礼用の匙で乳あるいは乳酒を天地の神々にむかってふりまき，盛大な宴会がはじまる。このような乳の散布については，比較的よく紹介され，知られてきた。ここで注目しておきたいのは，乳を散布する直前に，遂行されるべき行為が存在することである。そして，それこそが「ウルスをする（ウルスを入れる）」とよばれて，問題のウルスと密接にかかわる行為であるらしい。しめされた特定の骨が他の骨とどう違って如何なる意味づけをされる骨であるのかはわからないが，とり

8）モンゴル語で「する，おこなう」という動詞は入れるという意味にもなるので「ウルスを入れる」と訳出すべきかもしれない。その後の資料はもっぱら Sodonom に依拠してきたにもかかわらず，この重要な部分の記述だけは言及されてこなかった。

あえず，骨を焼くこと，すなわち一種の「骨占い」がおこなわれていたと考えられる。

占いにその骨を利用した当該のヒツジは「ウルスン・ホニ *ürsün xoni*（ウルスの・ヒツジ）」とよばれる。そして，初子ウマが馬捕り竿にかけられるときにまさに，そのヒツジが倒され，屠殺されることになっている [SODONOM 1965: 32]。さらに，この屠殺のために「倒す」という行為に対して「オナガハ *unagax*」という動詞をわざわざもちいることによって，子ウマの「オナガ *unaga*」と連係させて語られている。初子ウマの捕捉と，占いをうけるヒツジの屠殺とが，きわめて積極的に呪術的に関係づけられている，といえよう。ゼル（綱）の末端では骨占いがおこなわれ，始端には初子ウマがもっぱら集められている。骨占いをしてから，乳をふりまく。綱の一方で，骨占いによって天神の意志を受け入れて，もう一方で天神へ初乳をささげてもどす，という連続的行為になっているのかもしれない。また，一方の綱の端でヒツジに「ウルスを入れ」，もう一方でウマの「ウルスを出す」という対照性も十分想定できよう。

儀礼における供物として，ヒツジが一頭犠牲となるとともに，ウマの出す最初の乳が供されている。動物一頭と，最初の乳を供えるという特徴は，ウマ飼いツングースにおいて「最初の草と最初の乳」とよばれる春の祭日の儀礼にもみられた [GEORGI 1775: 286]。いま両者の関連性を明らかにすることはできないが，ともかく，モンゴルで「ウルス・ガルガハ・ヨス」とよばれる儀礼は，単に搾乳作業だけにかかわるものでないことは確実である。

初産であることは，個体にとっての搾乳の開始であるが，何よりもまず出産の開始であって，これから毎年のように子孫をふやすことが期待されて当然であろう。そうした期待こそが，「ウルス・ガルガハ」という名のもとに儀礼をおこなう意味として重要なのであると思われる。ウルスの語は，単に「種子」の意味をあらわしているのではなく，むしろ「子孫」という象徴的意味をになっていると考えられる[9]。乳を契機とする儀礼になってはいるが，その特別な名称があたえられている意味を考察すると，その本質は増殖儀礼にあると理解できよう。

増殖儀礼としての側面は，儀礼の際に語られる祝詞でも確認することができるよう

9) アラシャン地方で実施されてきた「ウルスの祭り」では，「ウルス」は「チンギス・ハーンの子孫」という意味であると解釈されている [SONJAB and SUCINBILIG 1989: 270]。
なお，この祭典の内容は，一般に初夏におこなわれるナーダム *naadam* と類似しているが，当該地方の王侯貴族，役人たちが準備にあたるという意味で，政治的な儀礼となっている。また，ナーダムで実施される「男の三種競技」について二つの点で異質である。第一に競馬の対象が去勢馬ではなく，「種オス」であること。第二に弓の競技が「騎馬」であること。
種オスウマで競争をおこない，その勝者となった種オスウマを祝福する点が，増殖儀礼と関連しているように思われる。

に思われるので，次に祝詞を検討したい。

### （3）儀礼における祝詞

乳をふりまく行為ツァツァルに際して語られる詩は，しばしば祝詞の形式をとっている。二行あるいは数行にわたって頭韻をふんでいるが，そうしたレトリックのニュアンスまでふくめて語彙を精密に翻訳することは今のところ筆者の力のおよぶところではない。祝詞の概要を紹介する意味で，ここでは典型的な一例をとりあげて以下に全訳しておく [SAMPILDENDEV　1987: 48–52][10]。

最上の／ハーンである永遠の天よ／ハーンである地と水よ／すべての広い馬乳酒／神聖な供物／10のツァツァル／至福の祝宴／すべての財産が／豊富になれかしと／ハネガヤ草のはえた川の源に営し／73の母をもつ／雌ウマに子ウマを産ませ／80万の集団を集め／葦のはえた川の源に営し／栗毛の耳を動かすものたちに子ウマを産ませ／すべてに水をのませ／芝のはえた川の源に営し／赤毛の耳を動かすものたちに子ウマを産ませ／長雨を降らせて／満州人のツォー・メルゲンをして／綱をひかせ／オイラト人のハル・ヒラウをして／子ウマを馬捕り竿にかけさせ／チベット人のツェツェンをして／自分の鍋をおかせ／タタール人のシヒホトをして／二歳子ウマのたてがみを切らせ／ツァガーダイの男シャマンをして／乳をふりそそがせ／ツァンフランの女シャマンをして／手おけをもたせ／青毛の未調教のウマをひかせ／気ままに動く本能を／苦しめて投げ倒す／現今の上の／権力のある永遠の天よ／すべての母なる大地よ／最上の／ハーンである永遠の星よ／地水よ／万の星よ／満の月よ／金の太陽よ／すべての星座より／日の良きを選びて／幸ある日を／月の良きを／選びて／良き日に乳をふりまく！

乳そそぎの理由は／何かといえば／運命をもって生まれた／青毛のまだらの／雌ウマであるおまえの乳を／動くすべての動物は味わわなかった／青毛のまだらのおまえの子ウマが味わった／ハーンである永遠の天から／運命をもって生まれた／すべてのものは味わわなかった／黒毛のおまえの子ウマが味わった／舌のあるものは味わわなかった／栗毛のおまえの子ウマが味わった／口のあるものは味わわなかっただろう／まだらのおまえの子ウマが／味わった／手を広げようと／五本の指を触れた／器を受けようと／黒のおまえの桶を触れた！／豊かな馬乳酒／おまえの白いツァツァルを／そそぎ，ふりまく！

開始を知らしめた[11]／権力あるミラー天に／99ふりまきにふりまく！／来たものは帰り／居たものは富み／一般の天運を／私に与え賜え！／すべてを知らしめた／ハーンである永

10）採取されたテキストは，文字化に際して編者によって改行などの校訂がほどこされている。本稿での翻訳はすべて，それぞれの資料に対して編者がほどこした校訂をそのまま受け入れている。したがって，中略や一部の省略もまた，編者によるものであり，翻訳の際の修正ではないことをあらかじめ断わっておく。

11）ミラー天に関する形容ついて，この編者は「開始を告げる」と校訂している。この「開始↗

遠の天に／99ふりまきにふりまく！／4つの金敷[12]をもつ天に／49ふりまきにふりまく！／金の太陽に／29ふりまきにふりまく！／エスレン・ホルムスタ天に／29ふりまきにふりまく！／大地と天に／29ふりまきにふりまく！／四方の天に／49ふりまきにふりまく！／八方の天に／89ふりまきにふりまく！／草の山に／いっぱいに9ふりまきにふりまく！／楽海に／いっぱいに9ふりまきにふりまく！／仏法の永遠の大地に／いっぱいに9ふりまきにふりまく！／権力ある氷の山と／361の生き物／45の息子に　／いっぱいに9ふりまきにふりまく！／はくように集める／大地の主に／勇敢に集める／水の主に／いっぱいに9ふりまきにふりまく！／アルタイ・ハーンの山／上の12の河に／合流する遙かな牧地に／いっぱいに9ふりまきにふりまく！／ハンガイ・ハーンの山に／いっぱいに9ふりまきにふりまく！

ケルレン河，トール河に／いっぱいに9ふりまく！／エルチス河に／いっぱいに9ふりまく！／丘や小山に／いっぱいに9ふりまく！／デリウン岳に／いっぱいに9ふりまく！／ゆれる枝葉のしげった木に／いっぱいに9ふりまく！／アルタイ山のイデル河に／いっぱいに9ふりまく！／移っていく土地に／営する所に／いっぱいに9ふりまく！／どこに住もうと出会おうと／その土地水に／いっぱいに9ふりまく！／すべてに／99ふりまく！／権力あるマリアン（ミラー）天に／すべての母なる大地に／すべての幸ある脂肪，油，馬乳酒を／明るい炎に注いですごし／すべての人びとが飽きることなく／幸福を求めてすごし／求める9つの望みによって／このように幸せであれかし。／富裕になって／病も忌みも／痩せも疥癬もなく／失せ物捜しもなく／平和に幸せであれかし／草水が春には／豊富にあって安心で／今の夏と／秋には／つねに快適であって／冬の雪は／時に応じて降って／少しも損害がなく／われわれが皆／永遠に幸せであれかし。／井戸の水や／川の岸に落ちることなく／盗難やいつわりや／狼害に陥ることなく／困難や／辛苦に出会うことなく／すべてのものに／敵にならずに／永遠に幸せであれかし！

この長い祝詞はおおよそ三つの部分に便宜的に分解することができよう。「最上の」という句から第一の部とし，「乳そそぎの理由は」という句からを第二の部とし，「開始を知らしめた」という句からを第三の部としておく。

第一部では，ウマの出産および搾乳作業の模様が叙述され，星占いにしたがって選定された吉日にこの儀礼がおこなわれることを明示している[13]。第一部で注目される

↘ *exlex*」に代わって，たとえば elgi「哀れみ」と解釈しているものや [SERRUYS 1974: 39; DAMDYNSURUNG 1959: 97, 99], alba「義務」とみているものもある [HEISSIG 1966: 227]。

12）天神の一種として，ここでは「四つの金敷」と校訂されている。同様の句は他のテキストにもみられる。たとえば，Rintchen 本の別のテキストでは *Tüsid* であり [RINTCHEN 1959: 35]，また *dogsid*「荒々しい」とみて，「怒れる四天」と解釈しているものもある [SERRUYS 1974: 41]。

13）祝詞は，あくまでも言語表現であって，そこに描かれる手続きがかならず実行されている ↗

表現は，「子ウマを産ませる」という繰り返しである。夏営地へ移動してからそこで出産をむかえさせる，という移動と出産との関係がえがかれている。夏営地となる谷ごとにウマの毛色が変えて表現されているのは，伝統的なレトリックである [蓮見 1980]。搾乳作業の描写については，モンゴル族以外にも満州族やチベット族などまで登場しており，統治力を誇示する政治的な表現をともなっていることが特徴的である。

「乳そそぎの理由は／何か」ではじまる第二部は，まさに儀礼の契機を説明している部分である。この部分を特徴づける表現は，毛並の模様を指定して，「おまえの子ウマが味わった」という繰り返しであろう。母と同じ毛並をもつということで実子を表現し，したがって実子だけが味わったことを意味していると考えられる。これが搾乳の開始でもあるのだから，それまではたしかに実子しか味わっていない。すべての生き物，口や舌のある生き物，とりわけそのうちの人間が味わったわけではないことが強調されているのであろう。まさに初搾りであるという初物らしさが繰り返し表現されているといえよう。

第三の部は，乳をふりそそぐ相手である神々の名のリストに相当する。天の名として，ゾロアスター教の影響をうけて広く受容されたホルムスタやソグド語に由来するエスレン *esüren* [SERRUYS 1974: 38–39] が登場している。まず諸々の天の名称が羅列され，つづいて大地の神に相当する山や河川などの地名が並ぶ。たとえば，デリウン *deligün* 岳は，チンギス・ハーンの生誕地とされる場所である [元朝秘史巻 1–59段（村上訳 1970: 78）]。頻繁に登場する 9 という数字は，シャマニズムで重視されている数であり [JUKOVSKAYA 1988: 144]，匙の形状と対応していて，一振りで 9 滴がとびちることを表現している。乳をささげることによって天地の神々の加護をもとめるという内容になっている。

以上のような祝詞の場合，もはやその内容はウマに関連するばかりでなく，生活全般に関する幸福の祈願となっており，普遍的な目的をになっている。そうした普遍的な祈願の儀礼が実施されるようになる儀礼化の契機は，実子だけが味わったという意味の表現にこそ，集約的にあらわされているであろう。この表現は必ずしも「初子」とは断定できない表現であり，また増殖儀礼としての性格も色濃くあらわれているとはいえない。しかし，明瞭に「初産」を表現している祝詞の例もみとめられる [SER-

↘ とはかぎらない。しかしながら，たとえ実践されていなくとも，そのようにすべきであると認識されているもの，と理解することは不当ではあるまい。以下の考察では，そうした観点から，祝詞にみられる手続きに関する表現は，認識の次元での必要所作とみなす。

RUYS 1974: 23–34]。20世紀初頭にオルドス地方から将来された，ウマの搾乳儀礼の祝詞であり，ふりまくウマの乳について以下のような表現が反復されている。

若いメスウマのゾラグ（馬乳酒）の最上／初産メスウマのオーラグ（初乳）の最上

わざわざ若いという形容詞がもちいられていることも注目されるが，何よりも明快なのは，「初産」の意をあらわす語彙トミ *tomi* がもちいられていることである。後述するように「初乳」については「初産の際の初乳」をあらわす語彙が選択されていないけれども，「初産」であることはまちがいない。

また，他の例で増殖儀礼をよみとることもできる。たとえば，宴席でしばしばのべられる次のような定型的表現がある [XORLOO 1969: 43]。

ゼルにつないだ子ウマは／野獣よりもたくさんに
おもがいをつけた子ウマは／鶴よりもたくさんに

さらにまた，祝詞における次のような表現からも増殖の祈願をよみとることはできよう [SERRUYS 1974: 34]。

メスウマは乳房をもつようになれ／不妊メス畜が胎児をもつようになれ

増殖儀礼であることを象徴的に表現しているとみなされる語彙「ウルス」については，Sodonom が採録している次のような表現が注目される。宴席にまねかれた客は，「ウルスン・イデー *ürsün idee*（ウルスの・食べ物）」と称して，ヒツジをはじめとする食品を持参する。その際，主人と客とのあいだで，道中いかに来訪したか，何を持参したかなどについて，儀礼形式で簡単な問答をおこなう。手みやげの食品であるヒツジについても，定型的な形容をしているうちにウルスの語彙が登場する [SODONOM 1965: 34]。

千のヒツジの／先頭をいく／万のヒツジの／頭をいくヒツジ！／……／この家の模様のある葦毛のメスウマから／金の胸をもち／銀の尻をもつ／子ウマが出た（生まれた）ので／ウルスに向けて出したヒツジぞ！

すなわち，ホストである牧戸に立派な子ウマが生まれたから，その立派さに釣り合う

だけの，立派なヒツジであることをゲストが証明しようとする語りになっている。この語りにおける「ウルス（種）」は決して「乳」の比喩表現ではあるまい。子ウマのことをさしており，まさに「子孫」の意味であると解されよう。子ウマという子孫を具体的にさししめすとともに，ホストである牧戸の子孫をも示唆しているのではないだろうか。

今日では，ウルス・ガルガハのウルスは，あまり疑われることもなく単純に「乳」を意味すると解されている。つまり「乳を出す」という名を冠した，搾乳シーズンの開始儀礼であると一般にみなされている。たしかに，種を意味する語彙ウルは，精子をも意味し，一方，乳は白濁した液体であるから，精子の表徴となりやすいにちがいない。インドのヒンドゥー儀礼では明らかにそうした意味をになって乳が利用されており，それがモンゴルに普及ないし影響をあたえた可能性も十分に考えられる。ただし，そうした乳のイメージを固定してしまうことは，搾乳儀礼にひそんでいる，搾乳作業以外の要素を等閑視することにつながる。たとえ，乳を使用して乳をめでる儀礼ではあっても，「ウルス・ガルガハ・ヨス」と命名される意味は，子孫を出すようになったことを祝うことにこそあると考えられる。そして，そのように増殖に注目しているからこそ，乳を精子の表徴としても矛盾がない，と理解すべきではないだろうか。

## 3.　ウシの搾乳儀礼

### （1）ウシの搾乳作業

ウシは，表1にみられるように牛車に駕して交通・運輸手段としても重要ではあるが，乳量が豊富で，搾乳目的にもっとも適した家畜であることはいうまでもなかろう。ウシについても，交尾期が人為的にコントロールされておらず，出産はかなり長期にわたってばらつく。そして，乳の分泌量や子ウシの健康状態，各牧戸の労働力の多寡などに応じて，それぞれのウシの搾乳について一日の回数や期間が決められる。したがって，搾乳作業は対個体ごとにばらつきをもっている。おおよそ，シーズン当初は個体ごとに搾乳されることが多く，本格的な搾乳シーズンになるにしたがって数頭まとめて搾乳されるようになる（写真2参照）。まとめて搾乳されるときには，しばしばウマと同様にゼルとよばれる綱を地面にはわせて，そこに子ウシをつなぐ。ただし，この綱に子ウシを一日中つないでおくわけではなく，搾乳作業終了後は母子はそれぞれ別に放牧される。子ウシによる催乳（＝suckling）がおこなわれてから，子ウシを

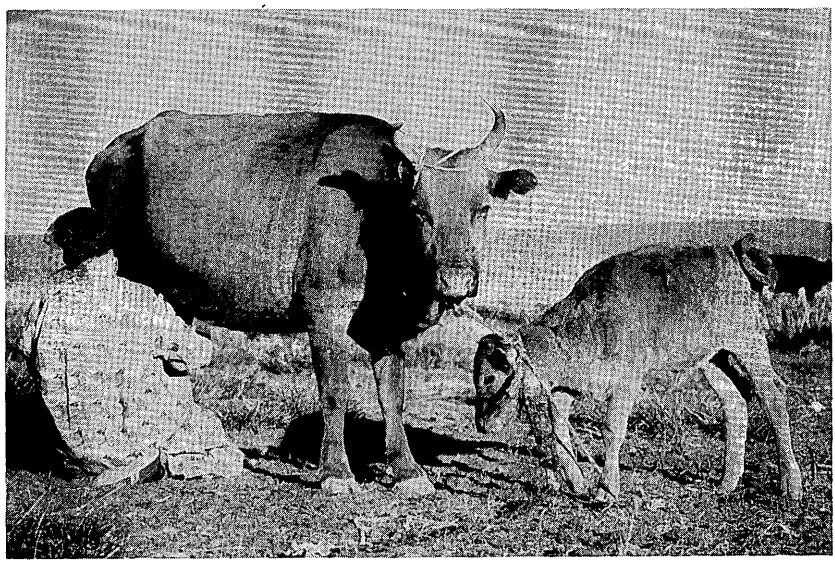

**写真2-1**　ウシの搾乳

**写真2-2**　ウシ搾乳用の綱

ひきはなして搾乳し，残り乳を哺乳するしばらくのあいだのみ，母子が一緒にされている [梅棹　1951]。搾乳の最盛期は朝夕二回搾乳するので，放牧中ばかりでなく睡眠中も母子は分離されている。

### （2）儀礼における手続き

出産および搾乳が個体の状態に応じてばらばらに実施されるウシについては，そもそも搾乳をいっせいに開始するという性格がみられない。搾乳作業全体の開始を画するような「とき」が存在しないものの，搾乳儀礼はおこなわれたらしい。儀礼の時期については，ウマのように夏の行事ではなく，ヒツジと同様に春の行事であるとされる [SAMPILDENDEV　1985: 55]。そして，ヒツジの儀礼をのべながら，ウシの儀礼についてもヒツジと区別せずに記述しようとされている。しかし，明確にウシの儀礼として抽出することができないので，本稿では一応それらはヒツジの儀礼に関する記述として次章であつかうことにする。

今日では，搾乳儀礼をもはや観察することはできないが，初産をむかえたメスウシに対して，小石をのせておとなしくさせるという簡単な呪術的行為がみられる。わずかに，初産にともなう儀礼的行為の名残としてみとめることができよう [小長谷　1991b: 227]。

初産メスが出す初乳は，家畜種をとわず，「ジルベ *jirbe*」とよばれる。一般に，初乳というと，母乳のうちの出産直後に分泌される特殊な成分をふくんだものをさすが，こちらは「オーラグ *uurag*」とよばれる。両者は，これまで辞書で区別することはできなかったが，牧民たちのあいだでは，初産であるかいなかによって明確につかいわけられていた [小長谷　1991b: 227]。このように，初乳という語彙からみても，初産は峻別されうる対象なのである。

本稿が対象としている生業儀礼としての搾乳儀礼は，搾乳シーズンの開始に実施されることから一般に「初乳の祭り」としても理解されてきた [ハルヴァ　1971: 505;　内田　1987: 41]。ただ，この初乳に関しても二重の解釈が可能だったことになる。13世紀のカルピニは，その旅行記に「どの牛でも馬でも，その最初に出す乳は，いつでも自分たちの偶像に供えます」と記していた [ドーソン　1965: 11]。この記述における「最初に出す乳」というのも，出産ごとの初乳ではなく，個体史上の初乳をさしていたのではないだろうか。出産のたびに最初に出る「初乳（オーラグ）」も，生物学上重要ではある。しかし，儀礼上より重要であるのは，これまでみてきたような初産の重要性からみて，「初産のときの初乳（ジルベ）」であったと思われる。

### （3）儀礼における祝詞

Rintchen 博士の整理による『モンゴルのシャマニズムの研究資料』には，ウシについても「ウルス・ガルガハ・ヨス（種を・出す・しきたり）」という名称を付した，中国内蒙古自治区オルドス地方で採録された次のような祝詞がおさめられている。Sampildendev の『モンゴルの習慣にみられる口承文芸』にあるウシの搾乳儀礼の祝詞も，これを再録したものである [SAMPILDENDEV 1987: 54–55] が，かなり省略されている。そこで，ここではオリジナルを全訳しておく [RINTCHEN 1959: 33–36]。

先祖の父よりうけついできた／このすべての人々の習慣となった／ハーン・チンギスの時代から受け継いできた／すべてのモンゴル人の習慣となった／ウシやヤクのウルスを出すしきたりを／ゆうべのたそがれどきに遂行しよう。

はじめて子ウシを産んだメスウシの乳を／清い器に味わうことなく保管しておいて／アイラグ（馬乳酒）やタラグ（ヨーグルト），砂糖や黒砂糖，なつめやくるみを／美味な果実を，初乳や脂肪とともにささげよう。

祖先の母なる／権力ある永遠の天よ／すべての母なる大地よ／最上の／ハンである永久の天よ／ハンである大地と水よ／万の星たちよ／おまえの幸いな日をもとめて／白きメスウシの乳で／地水の主たち／白き翁に／9の9ふりまいて拝む。

ヤクの群れをふやす者である／ニンボダワ天に／9の9ふりまいて拝む。

ハイナク（ウシとヤクの雑種）を繁殖させる者である天に／9の9ふりまいて拝む。

バリヤマのウシを育てる者である天に／9の9ふりまいて拝む。

バルボの多くの赤ウシを育てる者である／威厳ある天に9の9ふりまいて拝む。

インドの多くのマキのウシを育てる者である／エレングンゲ天に9の9ふりまいて拝む。

チベットの多くの茶色のウシを育てる者である／ザルルサンボー天に／9の9ふりまいて拝む。

中国のダイバン・ハーンの農耕を豊かにする者である／多くのまだらのウシのホンダンワン天に／9の9ふりまいて拝む。

モンゴルのハーンの多くのぶちのはげ模様のまだらのウシの／運命をつかさどる天に9の9ふりまいて拝む。

マジャリスの長い角もつ青いウシを育てる者である／テケン天に9の9ふりまいて拝む。

カラキタイの赤く青い白まだらウシを育てる者である／ゾル天に9の9ふりまいて拝む。

英雄にする者，恵みをあたえる者である／エベレン天に9の9ふりまいて拝む。

病なく育てる者，各自の運命をつかさどる天に／9の9ふりまいて拝む。

自分のうまれ年のハーン天に／9の9ふりまいて拝む。

母の扉の幸ある天に／9の9ふりまいて拝む。

外国の信仰対象や灯明をふやす者である天に／9の9ふりまいて拝む。
兄である天に9ふりまいて拝む／弟である天に9ふりまいて拝む。
アタガ天[14]に9ふりまいて拝む。
コルチン天に9ふりまいて拝む。
アジライ天に9ふりまいて拝む。
威厳ある天に9ふりまいて拝む。
雨をふらせる天に9ふりまく。
農耕を豊かにする天に9ふりまく。
盟友を約した天に9ふりまく。
大地を支配して毒をもたらす／鉄の鼻をもつもの，毒ある花，／虫，熱い日照りをもたらす天に／いっぱい9ふりまく。
ハンである永遠の天に9ふりまく。
4つのトゥシド天[15]に／4の9ふりまく。
黄金の太陽に2の9ふりまく。
半月形の月に2の9ふりまく。
エスルン・ホルムスタ天に2の9ふりまく。
与えた天に2の9ふりまく。
四方の天に／4の9ふりまく。
八境の天に／8の9ふりまく。
アルチ天に2の9ふりまく。
西方の庇護者ハブタドに／2の9ふりまく。
卵のごとく白き（ウマ）[16]に2の9ふりまく。
仏法の天に2の9ふりまく。
33の判官である天に／2の9ふりまく。
偉大な9の天に／2の9ふりまく。
マハソヴァリ天に2の9ふりまく。
草の山に2の9ふりまく。
須弥山に2の9ふりまく。
楽海にいっぱいに9ふりまく。
権力ある氷の山に9ふりまく。
361の生き物に／いっぱい9ふりまく。

14）アタガ天は，雷天とみてよいであろう。これについては専論がある [Xortsabagator 1987]。
15）前注12参照。
16）「卵のごとき」というレトリックは，しばしば白色の形容にもちいられるが，ここではチンギス・ハーンにささげられた白馬をさしている [Dzamtsarano 1961: 205-211] と思われる。

45の息子に／いっぱい9ふりまく。
はくように集める土地の主たち／注ぎ集まる水の主たちに／いっぱい9まく。
アルタイ・ハンの源に／12の河が注いでいる／アラグ・スルマ（湖）の合流点でハタンの源に／いっぱい9ふりまく。
中国の五台山に／いっぱい9ふりまく。
ハンガイ・ハンにいっぱい9ふりまく。
ハラガナ・ハン（青山）にいっぱい9ふりまく。
ボルハト・ハンにいっぱい9ふりまく。
ケンテイ・ハンにいっぱい9ふりまく。
ゼルメン・ハンにいっぱい9ふりまく。
シンホラ・ハンにいっぱい9ふりまく
オノン河のバルジウン島にいっぱい9ふりまく。
アルブス・アラシにいっぱい9ふりまく。
ヘイブン・上都の城に／いっぱい9ふりまく。
ウベグの城にいっぱい9ふりまく。
クネ・ハンにいっぱい9ふりまく。
モレドの部族にいっぱい9ふりまく。
ハンの母なるセレンゲ河にいっぱい9ふりまく。
ハンであるオルホン河にいっぱい9ふりまく。
タミル河にいっぱい9ふりまく。
トーラ河にいっぱい9ふりまく。
ケルレン河にいっぱい9ふりまく。
エルチス河にいっぱい9ふりまく。
ホア丘の主であるホア・チョルブンに／いっぱい9ふりまく。
デリグン岳に4ふりまく。
偉大な島にいっぱい9ふりまく。
枝葉のしげった木にいっぱい9ふりまく。
オブスの源にいっぱい9ふりまく。
マハ・カラのマンライ・オラーン旗に／いっぱい9ふりまく。
上には99の天に／下には77の母なる大地に／いっぱい9ふりまく。
すべてのものを支配する／ハン・ホルムスタ，33の天に／いっぱい9の9ふりまく。
チャガダイの男シャマンによってツァツァルをささげさせよ／チャンホランの女シャマンによって手おけをもたしめよ。

このように，ウシの種類と天の名称を対応させる形式でとうとうとその名が朗唱さ

れる。また，具体的な地名も羅列されて地の神々となっている[17]。こうした特徴は，ウマよりも明瞭である。ウシの場合，どの家畜よりも明瞭に系譜的な認識がなされていること [小長谷　1991b: 152] と関係しているのかもしれない。とはいえ，乳の出が多い血統が選別されているようには思われない。少なくとも，乳にばかり注目して乳量増加をもっぱら祈願しているというわけではなさそうである。

一連の山の名がハンとなっているように，地主神が地名によって列挙されているのに対して，天の神々の多くはチベット語やサンスクリット語など外来起源の多様な語彙を冠している。そのなかで，土着的なものとして注目される [SAMPILDENDEV 1985: 40] のは，この祝詞の前半に登場する「ツァガン・オブゴン *cagan öbgön*（白き・翁）」である。畜群の増殖などをつかさどる翁だが [MOSTAERT　1956: 291]，ウシの群れをつかさどる主としてはとくに「ミャルザン　*mialjan*」の「白き翁」とよばれる [RINTCHEN　1959: 37]。このミャルザンとは，牛疫をあらわす病名であるから，「みにくい白き翁」とでもいえよう。この病名は罵倒語として，あるいはあざけりつつも可愛がるときのよびかけとして，ウシおよび人に対してもちいられ[18]，また邪気払いの効果が期待されて意図的に悪名でよぶという意味で，ウシおよび人に対してもちいられる。両義的なよびかけ語であるといえよう。ウシにとって恩恵と災厄を同時にもたらしうる神もまた，善悪かねそなえた両義的な存在である。ウシをつかさどるとされる両義的な天に対して，災厄をもたらさぬように願い，かつ恩恵をこいもとめる儀礼であることが祝詞からうかがえよう。

天地の神々にふりまく乳は，いずれも「2の9」や「4の9」などと9の倍数でしめされている。一回で9滴ふりまく行為がそれぞれ2度，4度と繰り返されることを意味している。

天地の神々が列挙されるに先だって，7節目に「はじめて子ウシを産んだメスウシの乳を」とある。この表現から，ウマと同様に，やはり初産をむかえた個体こそが儀礼的搾乳の対象となっていることを確認することができる。

---

17）こうした天の名についてはすでにHeissigやSerruysの研究が言及し [HEISSIG　1966; SERRUYS　1974]，また地の神となっている地名についても専論があるので [HALTOD　1966]，ここでは詳述しない。このような多様な神々のリストは，これまで再録される際にしばしば脱落していた。とりわけ，破壊者として定義づけられてきたチンギス・ハーンや宗教色のつよい名称は削除されて再録されてきたのである [SAMPILDENDEV　1985, 1987]。

この祝詞が採取された中国内蒙古自治区のオルドス地方は，チンギス・ハーンの遺品をおさめた宮殿をまもるために，諸部族から少しずつ切り離されて集合させられたという歴史的経緯をもつ集団の，移住地である [SAINJIRGAL　1983: 414]。そのような歴史的背景も，こうした多様な天地名のリストに影響しているのかもしれない。

18）髪をバサバサにさせているような女の子に対して，ミャルザンとよぶ。

つづく「清い器に味わうことなく保管しておいて」という句に注目すると，搾乳という作業そのものはこの儀礼に先だってすでにおこなわれてきた可能性もある。つまり，初産をむかえたメスウシの乳を搾ってそれを貯蔵しておき，味わわないということでいわば初物の状態を維持しておいて，儀礼で使用するのかもしれない。すでに搾乳作業そのものはおこなわれていたことになる。こうした推測は，上述したように，ウシの搾乳開始が個体ごとにばらつくという状況からみると，むしろ自然な様態であるといえよう。この儀礼は，本格的な搾乳シーズンがはじまる時期におそらく実施されるのであって，搾乳作業の開始そのものと直結している必要はない，と了解される。

祝詞のなかでは，「初乳（オーラガ）」の語が採用されていて，とりわけ初産の初乳（ジルベ）の意味を判別することはできない。ただし，このときにふりまかれるのはたしかに初産をむかえたメス個体のそれであると説明されている [Rintchen 1959: 37]。「味わうことなく保管され」た「はじめて子ウシをうんだメスウシの乳」がふりまかれると同時に，ヨーグルトや馬乳酒がささげられている。ささげられる乳製品類は，かならずしも初産メスという特定個体の乳による製品に限定されているわけではあるまい。ささげられるものの質ではなく，ささげる儀礼をおこなう契機としてこそ「初物」が重要になる，とみておきたい。「初物」といっても，農耕儀礼のように毎年収穫作業として繰り返される，季節的な初物ではない。そのような「相対的な初物」ではなく，個々の個体にとって初産をむかえたという，いわば「絶対的な初物」であることが儀礼化の契機となっているのである。

ウシの搾乳儀礼における祝詞の例としてさらに別の一連の句を訳出しておく。Rintchen 本に収録されたオルドス地方の祝詞を，一部だけ省略および改変して，Sampildendev が再録している [Sampildendev 1985: 41]。

> 毎日清い革袋がいっぱいになれかし／桶に入りきらないほど脂肪があり／器に入りきらないほどウルム（乳脂肪食品）があり／鍋にあふれんばかりにホサム（乳かす）があり／豊富な美味なる食べ物があるようになれかし／夏冬春秋の区別なく／豊富な食べ物があれかし／白きホロート（チーズの一種）やエーズギー（チーズの一種）をはじめとして／三つの白き，三つの美味なる／種の脂肪が尽きることなく／おおいに豊かになれかし。
> 声のよい，くびきの大きな／種ウシは決して乳を涸れさせないよう遂行すれかし／突然の災害や死病や／盗難や詐欺や雪害がないようになれかし。
> 草や水が豊かで，すべての土地に家畜が／ハルガナや穀類のように育てかし。

「種ウシは決して乳を涸れさせないよう遂行すれかし」という表現は，まさに毎年か

ならず交尾が成功し，出産が連続することを祈願している。乳量の増加が期待されているばかりでなく，それをもたらす根本的原因すなわち出産の頻度そのものが期待されていることになる。初産をむかえるということは，これを利用しようとかかわっている人にとって，当該のメス畜が成熟年齢に達したということにほかならない。メスウシにとってみれば，まさに通過儀礼に相当する時点を契機にして，個体にとっての搾乳の開始にあたって，出産という豊穣を祈願した増殖儀礼がおこなわれるのである。

交尾は自由放任されており，その意味で出産は管理されていない。したがって，できるだけ毎年のように出産するようにという希望は，儀礼的に期待されるばかりである。儀礼あるいはそこでの祝詞によってのみ，かろうじて管理されているといってもよいであろう[19]。

こうした増殖への期待には，「ハルガナや穀類のように」育ちますようにとして植物イメージが利用されている。ハルガナ *xargana* とはクワ科の灌木である。牧畜儀礼にみられる植物イメージは，たとえばアンデスの場合では毛の増長・生産に関するレトリックであった [友枝　1986: 57–73]。モンゴルのこの例では，個体数が増えること，すなわち繁殖が植物の種子で形容されている。ここで穀類と訳出したモンゴル語はボダー *budaa* で，モンゴルのボダーといえば一般にキビを意味する。

また，もとの Rintchen 本では，次のような文言がくわわっていた。

ふりそそいだ器や手おけを／異国の人に決してもたせるな
残った底を保管して／その器に入れるしきたりである

このうちの「残った底を保管して，その器に入れる」という表現は，前の年の乳加工の残りかすがついている器を次の年にも利用すること，そうすることで継続的に乳酸菌を保存して利用する習慣がある，という意味であると思われる。このように，乳加工の開始も描写されることがあり，ふんだんな乳製品とその豊富さが語られてもいる。しかしながら，そのような乳をめぐる表現は，個体にとって初めて乳を出すときにのみ語られることに留意する必要があろう。

ウシの搾乳儀礼については，その行為の詳細は不明であり，祝詞から判断するしかない。とりあえず，この祝詞だけをウマと比較すると，ウマの場合にみられなかった

19)　ことばの呪的力（magical power of a word あるいは，ことだま）による生殖管理といってもよいであろう。このような言語的操作によって生殖管理を期待する状況をよくあらわした例として，ウマの搾乳儀礼の祝詞に「祝詞によって祝福したメスウマが産んだ」という表現がみられる [Serruys　1974: 33]。

「はじめて子ウシをうんだ」という表現があり，初産であることが確認しやすい。ただし，ウマにみられたような搾乳シーズンの開始を説明する箇所すなわち「(儀礼をとりおこなう日までは) 実子だけが味わってきた」といった繰り返し表現はみられない。ウマほどには搾乳シーズンの開始と直接的なむすびつきがみられない，といえよう。このことは，実際のウシの搾乳作業が，ウマほどに明確に区切られて開始されるわけではないという実態を反映している。また，一時的に大量に消費してしまうしかないウマの乳と，長期保存のきく多様な加工のできるウシの乳との違いを反映しているとみなすこともできる。こうした乳加工の差異はさらに，ウシの場合の祝詞に多様な製品名としてあらわれてくる。つまり，ウシの場合は，搾乳作業よりも乳加工作業にかかわる表現が卓越している。

しかしながら，ウシの搾乳儀礼がおこなわれる機会は，ウマと同様に搾乳開始であるとされ，その儀礼化の契機はまさにウマと同様に，「初産」というメス畜個体にとっての増殖開始にこそある。乳を対象にし，また乳を最大の演出素材として儀礼をとりおこなうとはいえ，祝福の契機は個体の成熟であり，出産の開始であると了解される。だからこそ祝福される内容もまた繁殖・増殖にあるといってよいであろう。

このように，ウシとウマを共通に理解しておくと，むしろウマの場合の特殊性が明瞭になる。すなわち，ウマの場合のほうが，搾乳シーズンの開始という季節性をともないやすい，という特質をそなえているのである。

## 4.　ヒツジの搾乳儀礼

### (1) ヒツジの搾乳作業

ヒツジは，モンゴルでもっとも普遍的に分布する家畜である。モンゴルにおける利用度を他の家畜と簡単に比較すると，表1のように，交通手段としての利用にかける点をのぞいて，多様に利用できる家畜であることが理解される。そうした多様な利用のなかでも，とりわけ肉用畜としてヒツジは重要であるが [吉田　1983]，くわえて搾乳の対象でもあった。ただし，中国内蒙古自治区ではウシの増加にともなって，ヒツジ・ヤギを搾乳する地域が縮小し，搾乳する牧戸が減少している。搾乳儀礼どころか搾乳そのものがみられなくなりつつある。

ヒツジの場合，交尾期が人為的に管理されているために，出産も一時期に集中する。その時期については，時代とともに遅くなりつつあるといわれている。たとえば，18

世紀半ばまでハルハ（現在のモンゴル人民共和国にほぼ相当する）中央部では，冬の終わりの月（旧暦12月）であったが，19世紀半ば頃のハルハの東部では春の中の月（旧暦2月）になっと，という [SAMPILDENDEV 1985: 38–39]。地域差もあるにちがいないが，おおよそ2ヶ月遅くなったらしい。19世紀半ばのトーワン文書によれば，第10条に，春分の日の頃に出産するように交尾期が指導されている [NATSAGDORDZ 1968: 115]。多少のずれはあるものの，現在もほぼ同時期とみなせる。その頃に，約1ヶ月にわたって出産が集中する [小長谷 1991b: 40, 246]。

現在では，多くの子ヒツジ・子ヤギが生後およそ3ヶ月をむかえる頃に，ヒツジ・ヤギの搾乳が開始される。各個体のあいだで生育の度合が異なるが，いっせいに搾乳されることになる。この搾乳作業の開始に際して，ツァツァル（乳の儀礼的散布）がおこなわれたらしい。かつては，出産時期がより早かったこと，またヒツジの乳への依存度が高いために搾乳が生後のより早い時点で開始されたと考えられることなどから，今日の搾乳開始時期よりもかなり季節的に早い頃に儀礼がおこなわれたと推測される。

なお，群れの構成上，ヤギはヒツジと一緒にされており，搾乳作業のうえでも一括されている。にもかかわらず，ヒツジの搾乳儀礼の記述に際してヤギのことはまったく記されていない。ヤギとして独自の搾乳儀礼が認められないばかりでなく，ヒツジの搾乳儀礼に混入される様子もうかがわれない[20]。

### （2）儀礼における手続き

Sampildendevの『牧民の伝統的な習慣』によれば，搾乳儀礼にあたって次のような準備をおこなう [SAMPILDENDEV 1985: 39]。芽ぶいたアルツ（香として使用するネズの木の芽）で屋内に香をたき，芽ぶいていないアルツをアギ（ヨモギの一種である香草）とまぜて，ウルム（脂肪分を主体とする乳製品の一種）やツォツギー（サワークリームのような乳製品）などとあわせて皿にもりつけて，宿営地の西北方あるいは四方におき，おおいに香をたく。それから，搾った乳を清めた器にいれて，女性の一人がもち，もう一人の女性が乳をふりまくために儀礼用の匙をもつ。そして，天地に99回，山河などの土地の神々，祖先霊などに向けて77回ふりまきながら，恵みをこうことばをのべる。

20）ユーラシア大陸を西に進んだトルコ系遊牧民族のユルックが，コーリング（呼びかけ）など家畜管理のさまざまな方面で，ヒツジよりもヤギについてとりわけ洗練させているのに対して [松原 1983:（上）47など]，モンゴルではまったくそのような傾向はみられないのである。

このような儀礼的搾乳の対象となるのは，「オーガン子畜の母」であるという [SAMPILDENDEV 1985: 39]。オーガンとは，子ウマの場合にみたように，長子すなわち初子のことである。この語は，先述したように通常，個体にとっての初産の子という意味でもちいられるが，群れにとっての初子という意味でも用いられることもあるために，一応は二通りの解釈が可能である。もし，群れにとっての初子であれば，それはただ一頭に限られてしまう。ヒツジの場合とくに，ただ一頭から搾られる乳は茶碗一杯ほどの少量であるから，もしそれを天地にふりまけば，すぐになくなってしまうであろう。

前章，前々章でみたように，ウシおよびウマにおいて初産メスが儀礼的搾乳の対象となっていることは明確であった。ヒツジの場合もまた，個体にとっての初子つまり長子をオーガンと表現しているのではないだろうか。一般的な搾乳作業となると，初産であろうとなかろうと，メスの子をもとうとオスの子をもとうと，すべての子もちメスが搾乳の対象となるが，儀礼的搾乳においては初産メスだけが対象となると推測される。

基本的な儀礼化の契機は，家畜種をこえて共通しているようである。ただし，ヒツジのそれは，「ウルス・ガルガハ・ヨス」とよばれてきた形跡がない[21]。

### （3）儀礼における祝詞

乳をふりまくときにのべられる祝詞について，ヒツジの場合，ウマのようにいくつものバージョンが知られているわけではない。唯一の例も，本来はもっと長いものであったのが省略されつつ再録されたものしか入手できない。以下にそれを全訳しておく [SAMPILDENDEV 1987: 52–54]。これまでみてきた例と同様に，二行あるいは数行にわたって頭韻をふんだ祝詞形式である。

> 先祖の母なる代々権力ある永遠の天よ／すべての母なる大地よ／最上の／ハンである永遠の天よ／ハンである大地と水よ／万の星の丸き／月，金色の太陽／金の星／おまえの日の幸なるを／おまえの月の良きを求めて／良き日に乳をふりまく。
> 乳をまく理由は何かというと／青き永遠の天より運命あって生まれた／青きハルザン模様のおまえのヒツジの乳を／動くものすべてが決して味わっていない／青きハルザン模様の

21）ただし，近年刊行された事典では，ヒツジとウマの搾乳儀礼がまとめてウルス・ガルガハ・ヨスとして記されるようになっている [ARIYASUREN 1991]。「初乳」の祭りであることは強調されているが，「初産」については明記されていない。ウマの搾乳儀礼についてもその点については言及していない。

おまえの子ヒツジが味わった／ハンの永遠の天より運命あって生まれた／黒きおまえのヒツジの乳を／すべてが決して味わっていない／黒きおまえの子ヒツジが味わった／舌のあるものは決して味わっていない／ハルザン模様のおまえの子ヒツジが味わった／生き物は決して味わっていない／まだら模様のおまえの子ヒツジが味わった／ハンなる天より運命あって生まれた／白きおまえのヒツジの乳を／白き帳幕で会見させて保管した／広げるといって五本の指が触れた／器に受け取るといえば／手桶けが触れた／広き偉大な約束を／白き偉大なツァツァルを／美味で偉大なおまえの乳をまく，私は。

乳をまく理由は何かというと／財産のある白いおまえのヒツジの／災厄が終わるために／救けて集めよと／偉大なる供物をそなえて／偉大な約束を／きわめて美味なる／白きおまえのツァツァルの乳をそそぐ。

…黄金の月に29回／半月形の日に29回／運命をつかさどる天に29回／英雄たる天に29回／四方の天に29回／八方の天に89回…

草の山に／いっぱい9回／須弥山に／いっぱい9回…

はくように集めた土地の主に／注ぎ集めた水の主たちに／29回そそぎ／デリウン岳にいっぱい9回／枝葉のしげった木に／いっぱい9回／これよりのちに／病災がなくなれかし。

生きものがまっとうする／至福あれかし／すべての利益が思いどおりに実現し／すべての動物をすくうために／偉大な力とともに完全になれかし。

以上のように，乳をささげることによって天などの神々の加護をもとめるという内容は，これまでにみてきた祝詞と等しい。全体としてはウシのそれよりもウマの祝詞と似ている。とりわけ，祝詞の前半部で繰り返し表現されている部分はウマのそれに酷似している。すなわち，「青きハルザン模様のおまえのヒツジの乳を／動くものすべてが決して味わっていない／青きハルザン模様のおまえの子ヒツジが味わった」といった表現である。青きハルザン模様は，葦毛で鼻面が白い毛並のことをいう。ヒツジの毛並のカテゴリーと天の種類とが表現上の対応をみせて，ウマの場合の類似表現よりもきわだっている。こうした表現は，同じ毛並をもつ子すなわち実子だけが味わったという意味であり，搾乳の開始が明確に表現されている。また，初子であると説明されていたことを考慮すれば，初物としての二重の意味を想定することができよう。すなわち，儀礼的搾乳の対象となったヒツジにとっては，生涯において「初めて」出す乳であり，その搾り「初め」なのであると。このような毛並がいくつも羅列されて重複して確認されていることからみても，複数の個体が対象とされているとみてよいであろう。つまり，群れのなかで最初に生まれた子とその母という一組だけを対象とするのではなく，初産メスたち全体を対象にしていると考えてよいように思われる。

この祝詞で興味深いのは，祝詞の最初の一語であるエムゲン *emgen* という単語で

ある。一般に，天は男性始祖に，地は女性始祖に対応して形容されることが多い。しかし，ここでは天は母として形容されており，エムゲンという先祖の母を意味するモンゴル語から発話されている。出産，増殖，乳などをめぐって母性が意識されているのであろう。

### （4）もう一つの搾乳儀礼

これまでみてきたように，ツァツァルとよばれる乳ふりまき行為を主体とする搾乳をめぐる儀礼を家畜種間で比較すると，その祝詞において，それぞれの家畜種に特徴的な表現の差がみられるものの，その契機や意図は共通しているとみなしてよいであろう。ただし，ヒツジにだけは，こうした共通のツァツァルとは別に，「ホグノ・ミャラーハ・ヨス *kögnö milaax yos*」とよばれる儀礼がみられる。ミャラーハとは，バターなどをぬって祝福する行為をさす動詞である。ここでバターがぬりつけられる祝福の対象は，ホグノとよばれる綱である。この綱は，子ヒツジや子ヤギをつなぎとめるための専用綱で，子畜の首をとめるための留め輪が結びつけられているものをさす。この儀礼の詳細は不明であるが，その際の語りとして次のようなものが知られている[SAMPILDENDEV 1987: 65]。

アルタイ・ハーンに住んで／なんとまあ美しいヒツジの／子ヒツジを綱につないだぞ／すべてが集まったぞ／祖母や母が撚った綱に／黄色の頭をもつ／白いヒツジの子ヒツジを綱につないだぞ／茶や食べ物や初乳（オーラグ）や脂肪で／清めて祝福してすごそう，私は。
ホヒー・ハーンに住んで／青き頭の子ヒツジを綱につないで／いっさいすべてが集まったぞ／老いた母の撚った綱に／青き頭の子ヒツジを綱につないだぞ／おまえの茶や食べ物や初乳（オーラグ）や脂肪で／清めて祝福してすごそう。
天たちのハーンであるホルムスタよ／天の恵みを乞う／ホライ，ホライ，ホライ
養って豊かにする宮殿の／天の恵みを乞う／ホライ，ホライ，ホライ
古いモンゴルの／恵みを乞う／ホライ，ホライ，ホライ
至福の山のあの威光に／恵みを乞う／ホライ，ホライ，ホライ
今日の天，父母の／恵みを乞う／ホライ，ホライ，ホライ
ガンガ河海のように涸れることのない／天の恵みを乞う／ホライ，ホライ，ホライ
太陽，月，星の光がある家の息子の／恵みを乞う／ホライ，ホライ，ホライ
玉や岩のようにこわれることのない／恵みを乞う／ホライ，ホライ，ホライ
この恵みを乞うたことにより祝福し／9種類の農耕の威力をあたえたまえ／恵みを乞う／ホライ，ホライ，ホライ

北斗七星の宝物の／恵みをあたえたまえ／上着や鎧の威力をあたえたまえ／恵みを乞う／上質の味のある食べ物の威力をあたえたまえ／恵みを乞う／ホライ，ホライ，ホライ

本稿での定義にしたがえば，この「ホグノ・ミャラーハ・ヨス」（子ヒツジ用の綱を油で塗布する祝福のしきたり）もまた搾乳儀礼である。ただし，「ホライ，ホライ」というかけ声は，福を招く儀礼に特有なもので，一般にこうしたかけ声をともなう儀礼は，モンゴルでは「ダルラガ *dallaga*（招福儀礼）」として類別されている。他の搾乳儀礼と異なったかけ声をもち，招福儀礼とみなされる理由は，この儀礼がかつて実施されていた時期にあるように思われる。というのは，ラクダの出産にかかわる儀礼が早春に実施され，やはりダルラガの形式を採用しているからである。ラクダの出産を祝福する際のダルラガは，渡り鳥の到来に応じて実施され，春の到来をつげる儀礼となっている。かつてヒツジの出産が冬から春にかけてというように季節的に早く設定され，搾乳もかなり早い頃から開始されたのであるならば，ラクダの出産と同様に，春の到来時期と一致しており，それが福を招くダルラガの儀礼にふさわしい用件であったのかもしれない。だとすると，夏の到来と密接にかかわるウマの搾乳儀礼とは異質であっても当然であると解釈することができる。

ところで，ここには，子ヒツジを綱につないで搾乳するという風景がえがかれている。今日みうけられるヒツジの搾乳風景とまったく異質であることが注目にあたいするであろう。現在では，写真3のように，ユーラシア大陸に広くみかけられるのと同様ないし類似の方法で，搾乳の対象となるヒツジやヤギを綱につなぐ。このようにメスをつなぐ綱はホグノとよばれることはなく，また留め具などは一切ない[22]。ただ単にヒツジの頭を交互に入れさせることによってつないでおり，そうした作業をホルボホ *xolbox*（結びつける）という。祝詞に出てくる「つなぐ」の語彙はいずれも，ホグノホ *kögnöx*（ホグノする，ホグノをもちいてつなぐ）であり，ホグノとよばれる綱を使用することを意味している。

ヒツジやヤギの搾乳にあたって，子ヒツジや子ヤギを綱につなぎとめるという方法は，ほとんど注目されてこなかったが，これまでにいくつか記録されてはいた。たとえば，モンゴルについて「羊だけは吸い出しの要がないが，仔羊を前につなぎ，人間は母羊の背後にまわり姿を見せずに作業をする」という記述がある [後藤　1968: 77]。ホグノという名称や綱の実態は記されていないが，かたわらに子ヒツジをつなぎなが

22）搾乳の対象となるメスのヒツジやヤギをしばる際に，このような留め輪付きの綱を用いる民族も，西南アジアにはみうけられる [松井　1980: 154, 190]。

**写真3-1**　ヒツジの搾乳

ら搾乳していたことだけは確認できる。また，モンゴルの北に位置するチュルク系のトバ(トゥワー)族の場合は，子ヒツジを始終つないで養育し，搾乳作業の前の催乳と搾乳作業の後の残り乳の哺乳という合間にだけ，子ヒツジを綱からほどく，という [VAINSHTEIN 1980: 63]。この子ヒツジ用の綱はコゲンとよばれ，カザフ語やキルギス語などのトルコ系諸語に共通しており，音韻的にモンゴル語でいうホグノとも共通している。ソ連中央アジアのカザフ族の場合，民族誌にコゲンが図示されている（図2参照)。搾乳の前に，子ヒツジ・子ヤギの首を，コゲンとよばれる長い縄についた輪（ブルシャク）に結びつける。大地に

**写真3-2**　ヒツジ搾乳用の綱

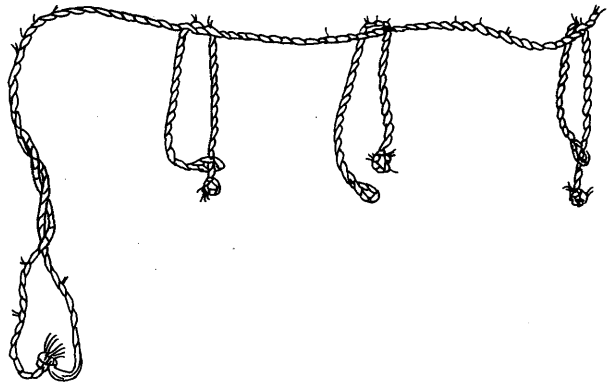

**図2**　コゲンとよばれる，カザフ族の子ヒツジ用の綱
(Akademia Nauk S. S. S. R. [1963] より)

張ったコゲンの端は棒に結びつけられている。一日二回搾乳し，そのたびに子ヒツジは残り乳を飲む，とある [Akademiya Nauk S. S. S. R.　1963: 356]。このコゲンないしホグノの語彙および実態がモンゴル系に起源をもつものなのか，それともトルコ系からの借用なのかは不明なものの，上述の祝詞が存在することから，カザフとほぼ同様の形状をもつような綱とそれを利用する搾乳方法が，モンゴルにも存在したとみてもよいであろう。

こうした搾乳方法は，子畜をつないでおいて搾乳時の母子分離をはかるという点で，大型家畜といわれるウシやウマの搾乳とよく似ている。とりわけ，一本の綱に子畜がずらりと留め具でつながれている様は，ウマの搾乳風景（写真1参照）に似ている。ウシの場合も，本格的な搾乳シーズンになれば，やはり同様に一本の綱に子ウシたちがつながれることになる（写真2参照)。ヒツジのもう一つの搾乳儀礼「ホグノ・ミャラーハ・ヨス」は，これまで普遍的とみられてきたヒツジの搾乳方法すなわち多くのメスをゆわえる方法とはまったく異なった，別の方法を特徴づける綱に対する，祝福儀礼なのである。

「ホグノ・ミャラーハ・ヨス」の場合，その祝詞のなかでは，個体にとっての搾乳開始がとくに意味づけられているわけではない。そのような対個体的な関係は表面化されておらず，むしろ「すべてが集まったぞ」と集合を表現している。人びとの集合をさしているのかもしれないが，もしヒツジについての表現なのであれば，子の集合のことであって，搾乳の対象となるメスの集合ではない。たくさんの子ヒツジの誕生に焦点がしぼられていることが，ダルラガという招福の形式にふさわしいのかもしれない。祝詞における表現内容という面では，これまでみてきたものとくらべて異質で

ある。しかしながら，技術的な基盤はきわめて大型家畜的であるといえよう。子をつないでおいて実子の匂いをかがせるようにしながら搾乳するという方法は，催乳の有無を無視して極言すれば，ヒツジを，ウマのように搾乳していたということになる[23]。

ホグノのように一個体ずつを結びつけるという方法は，少数の飼育には適応できても，現在のような多頭飼育には不向きである [SAMBUU 1966: 204]。家畜頭数の増加が，旧来の飼育方法および搾乳方法の消滅をもたらしたのかもしれない。もし，どこかでたとえ一部なりとも儀礼的搾乳が現在もおこなわれていれば，その際にだけ過去をうつしだして復原的にホグノが使用される可能性は残されている。詳細は今後の課題とせざるをえない。とりあえずここでは，ヒツジに特有の儀礼ではあるが，その技術的背景は，決してヒツジに特有なものではなく，むしろウシやウマと共通しており，その点において西南アジアなどでみられる一般的方法と異なっていることを確認しておきたい。ウマなどに共通した技術的背景がみとめられるという点では，生業儀礼として家畜種間で共通の基盤を有しているといえるかもしれない。

## 5. さいごに

モンゴルにおける搾乳儀礼について，その作業と儀礼における手続きおよび祝詞などを概括すると，ウマに限らず家畜種をこえて，「初産」が儀礼化の契機として非常に重要であることがみいだされた。乳はモンゴル遊牧文化の物質面においてもちろん重要な構成要素となっている。本稿はこの意味を軽視するものではない。ただ，その乳の祭りでさえも，搾乳を祝うことのほかに，搾乳をもたらす基本的要因として，出産の開始を祝う「増殖儀礼」という性格をもっていることを強調したい。乳はその形

23) このことは必ずしも，ヒツジの搾乳がウマの搾乳の技術的応用であるという意味ではない。ヒツジの搾乳において，今日ウマの搾乳にとりわけ顕著にみられるような子をおとりとして母をおびきよせておいたり，子の匂いをかがせながら搾乳したりといった母子の絆を積極的に利用した方法が採用されていることを示している。そして，このことは，さらに技術史的観点からみても，ヒツジの搾乳の開発において，母子の絆を有効に活用した可能性が高いことを示唆するであろう。詳細は記述されていないがキルギスにみられるヒツジの搾乳風景は [SHAHRANI 1979: 96]，まさに子ヒツジの匂いをかがせて母ヒツジをだますようにしながら，背後から搾乳しており，モンゴルにみられる母子関係介入の姿と酷似している [小長谷 1991b]。モンゴルでは，ヒツジの搾乳が消えつつあり，またたとえ搾乳されていても，もはやホグノが使用されず，子をつながない。そのために，モンゴルのなかで完結的に，育児期の母子関係介入と搾乳期の母子関係介入とのあいだに，こうした共通性をみいだすことはできないが，地域をこえることによって母子の絆を利用するという特質の連続性をみとめることができよう。

状ならびにその栄養的意義から，多義的なイメージをもちうるが，モンゴルの搾乳儀礼は，家畜個体にとっての出産開始ひいては搾乳開始という通過儀礼的な側面を契機として実施され，それゆえに増殖儀礼としての性格を色濃くおびているのである。

とりわけウマの場合は，その所有そのものが富や権力の象徴とされる。今日では，儀礼を実施しなくとも，ウマを搾乳する牧戸であること自体が，富裕の証にさえなるほどである。こうした特徴をもっているために，その搾乳儀礼はきわめて政治的な行為として展開しやすいであろう。家畜種のそれぞれに応じて実施される増殖儀礼的な搾乳儀礼のなかでも，とくにウマの儀礼が，人間の側の増殖儀礼すなわち子孫繁栄の儀礼的行為へと移行しやすい性格をそなえているといえよう。牧畜作業暦からみても，搾乳開始は夏営地への移動と，搾乳終了は夏営地からの移動と，それぞれ結びついており，牧閑期の夏祭りになる祝祭的性格をもちえたのであった。

搾乳儀礼が衰退した今日でも，なおこれが権力の象徴あるいは政治的行為として演出されている様子は，オルドスでのチンギス・ハーン祭典にみることができる[DZAMTSARANO 1961]。そこは，もはや馬乳を搾ることのできない生態環境にあるために牛乳で代替されているものの，マルコ・ポーロやルブルクらの記述を思わせるようにツァツァルを実行する。民間で実行されてきたとされる儀礼と比較すると，「アルタン・ガダス *altan gadas*（金の・杭）」という巨大な棒をペニスのごとく大地に立てて，それに乳をふりまくようになっている点 [DZAMTSARANO 1961; 利光 1989: 40–41] が，チンギス・ハーン祭典に特徴的である。黄金の杭に民族の繁栄が託されているらしい。増殖儀礼のなかでも子孫繁栄の意味をもっともにないやすいウマの搾乳儀礼こそが「ウルス・ガルガハ・ヨス」の主役であり，それがモンゴル帝国時代に祖先祭祀へとくみあげられた痕跡が現代に残っているのではないだろうか。儀礼の歴史的展開あるいは政治的展開については，オルドス地域研究として今後の大きな課題となるであろう[24]。

モンゴルのなかで家畜種相互間の比較をおこなうという枠組みで考察してきたが，ここでさいごに，モンゴルの搾乳儀礼そのものの相対化につとめてみたい。

搾乳儀礼はもちろんモンゴルにのみ存在するわけではない。たとえば，ルーマニアについて報告されている「牧羊祭」は，まさに搾乳シーズンの開始に際しておこなわれており，その意味では搾乳儀礼であるといえよう。「牧羊祭」を意味することばの

24）オルドス地方から将来された口承文芸のテキストが，もっとも充実しており，比較的古い時期から採取され，儀礼内容をよく反映している。本稿で採用したウシの祝詞の例もそうである。また，Serruys の翻訳も Mostaert 神父の将来によるオルドス地方のテキストにもとづいていた。他の地域にくらべてはるかにめぐまれている資料をいかす必要がある。

原義は，「不妊メスを乳メスから分ける行事」であるという [みや　1988: 24]。搾乳の開始にあたってヒツジの群れが乳メス群とその他の群とに二分されるから，そのような名称があたえられている。当地において，この分離作業はまた同時に，その日を境に母子が完全に分離されること，つまり子ヒツジの離乳をも意味している。こうした牧畜管理のスケジュールに応じて，まさに乳が豊富にしぼれるようにと祈願される。また，そのような性格は，搾乳競争というフェスティバルの形に展開してあらわれている。男たちが搾乳量をきそい，ひいては搾乳スピードをきそうのである。搾乳儀礼が，搾乳シーズンの開始という牧畜作業暦とむすびついているのはもっともなことである。また，乳の豊穣を祈願するのも当然であろう。ただし，同様に作業暦とむすびつき，同様に乳の豊穣を祈願することはあっても，モンゴルでは，搾乳量や搾乳スピードを競争するという形態へと展開しない。モンゴルでは，乳が出るような個体に成長したことを祝い，以降の増殖を期待するという増殖儀礼の性格をおびている。

ルーマニアに南接するブルガリアについては，より詳細な報告があり，おなじ地中海地域であるとはいえ，ルーマニアともやや異なっている。旧暦4月23日の聖ゲオルギウス祭が，牧畜作業暦と積極的にむすびつけられている [伊東　1988: 223–225]。この日に，夏営地への移動が（実際にではなく）儀礼的にはじめられ，また呪術的な搾乳がおこなわれるという。移動と搾乳のほかに犠牲の屠殺もともなうが，搾乳シーズン開始に際して実施されるという意味では，搾乳儀礼あるいは初乳祭といってよいであろう。ここでも，初産メスが儀礼的な対象となっているし，また増殖儀礼としての性格をもっているという。そこで，この二点について，モンゴルと比較検討しておく必要があろう。

ブルガリアの聖ゲオルギウス祭では，儀礼的な搾乳の対象として，最初に子を産んだメスか，この日にほふられる初子の母がえらばれるという。前者の「最初」というのは，初産という意味ではなく，群れのなかでトップに出産した，いわば先達という意味であるように思われるが，後者については初子の母すなわち初産メスをさしているであろう。両者はまったく異質な「最初」であるにもかかわらず，どちらでもよいということ自体，この儀礼がなんらかのイデオロギー的変容を経ているのではないかと思われ，興味深い。とりあえずここでは，モンゴルと共通する後者のケースについて，その初産メスをめぐる手続きを比較しておきたい。

ブルガリアの聖ゲオルギウス祭において屠殺されるのは，聖ゲオルギウスへのいけにえとしてえらばれた，白い毛並の初子ヒツジである [伊東　1988: 244]。この子ヒツジの雌雄の区別は記されていない。キリスト教世界のモチーフ [谷　1984] が援用

されているのであれば，おそらくオスの初子であろう。すると，儀礼的搾乳の対象となるのは，おおよそ次のようなプロセスで選択されることになる。ヒツジの群れのなかで，初産をむかえたメスのうち，およそ半分であろうオスの子をもつもので，そのうちとりわけ白い子をもつ，そういう母メスヒツジが儀礼的搾乳の対象にえらばれる。あくまでも初子の一つが選択されたのち，その母が選定される。このように，「初産メス」といってもブルガリアの場合は，子の雌雄と子の毛並をまず問うという点においてモンゴルとは異なる。こうした違いは何にもとづくのであろうか。

地中海地域の牧畜では，しばしばオスの子ヒツジが大量に屠殺される。搾乳儀礼にともなう犠牲としての屠殺は一頭であるが，牧畜作業としては，オスの子のほとんどが屠殺される。オスの子が屠殺されることによって，その母であった「母メス」はもはや母ではなくなり，搾乳対象として利用価値のより高い，単なる「乳メス」と化す。子オスの大量屠殺という作業は，移動に際する軽量化をもくろむ間引きである［谷 1984: 52］と同時に，搾乳作業を容易にする間引きでもある，と考えてもさほど無理はなかろう。牧畜管理の特質としてオスの子を殺すという行為が大前提として存在しており，その前提のうえで初子もほふられる。セム的一神教において，信仰の証として我が子を殺すというモチーフとなっているオスの初子の犠牲は，上述のような牧畜作業を背景にしつつ，子オスのなかから儀礼的存在として初子がとくに認識されたものであろう。そして，その結果として，オスの初子の母であるところの初産メスが特異的存在としてあらわれてくるのではないだろうか。すなわち，単純に個々の個体にとって初めて出産したことが儀礼の契機となっているとみなすわけにはいかない。この点が，モンゴルにおける初産メスへの認識と本質的に異なっているように思われる。

ブルガリアの聖ゲオルギウス祭では，超自然的な力があるとされる草花をヒツジにあたえることによって，搾乳量が増加すると期待される。また，その草花でつくった輪を乳が通過することによって，乳もまた超自然的な力をもつと想像され，新婚の夫婦にふりまく。このような乳のふりまき行為は，明らかに増殖への祈願をしめすものであり，乳と増殖はやはり関係づけられている。しかし，ブルガリアのように乳の搾乳量の増加を期待する特定の行為や，乳に対してきわめて特殊な力を意図的に付加するような行為は，モンゴルの搾乳儀礼にはみうけられない。モンゴルの場合，搾乳に慣れさせるためにできるだけ慎重な手続きをとろうとする思考と行為がみられるが，ブルガリアのような乳に対する特異的なかかわりはみられない。その意味では，モンゴルの搾乳儀礼はむしろ，乳をめぐってよりも増殖をめぐって展開されている，といえよう。ブルガリアのこのような呪術的な搾乳儀礼は，おそらくキリスト教以前の，

より土着的な習慣であろう。キリスト教的な脚色の有無にかかわらず，モンゴルの搾乳儀礼とは異質なようである。

ところが，ブルガリアにおいても増殖儀礼としての性格がみとめられるという。ただし，これは，聖ゲオルギウスに対して犠牲として初子ヒツジをほふり，その血あるいは共食後の骨をめぐって展開する要素である。つまり，増殖儀礼としての性格は，搾乳儀礼のなかにあらわれるのではなく，搾乳儀礼をも包括している聖ゲオルギウス祭において，搾乳儀礼と並行して実施される初子のほふりという局面でたちあらわれるものなのである。これに対して，モンゴルの場合には搾乳儀礼のなりたちそのものが初産を契機として，そのまま増殖儀礼になっていると解釈してよいであろう。

とりあえず，初産を契機にして，神にささげられるものの違いを，モンゴルとの差として明確に指摘することができる。ブルガリアなどの場合では，初産を契機として，神にささげられるのは初子である。初子が神に属すべきものとして認識されているとするならば，これに対してモンゴルでは，初乳が神に属すべきものとなっている。やはり同様に初産を契機としながらも，その初子が犠牲にされているわけではなく，初乳が天地にふりまかれているからである。

そもそも，乳の分泌と出産とは，分離できないほど密接な関係にある。したがって，儀礼として「乳を重視すること」と「増殖開始を重視すること」は，たがいに密接に関係しあっている。両者は共存しうる認識であって，分離しがたい儀礼の契機であるようにみえる。しかしながら，その一つの契機において，乳にもっぱら注目してその量的増加や質的向上をめざし，また乳の呪術的効果を期待する思考と，もっぱら出産に注目して個体数の増加を期待する思考とのあいだには，やはり異質な認識があると思われる。また，乳にもっぱら注目している前者では，肉として初子を神にもどす思考がみとめられ，逆に肉にもっぱら注目しているような後者では，初乳を神にもどしているという対比的な特徴として抽出することもできる。

ブルガリアとモンゴルとを簡単に比較してみると，家畜という類似した対象をめぐって，表層的にきわめて類似した要素がみられるにもかかわらず，本質的にかなり対比的な特徴をもった儀礼が展開しているといえるのではないだろうか。それは，異質な技術を背景にしながら，認識と技術とが相互に影響しあってきた結果なのではないだろうか。だとすれば，搾乳儀礼にかぎらず，牧畜技術体系の総体にかかわるであろう。たとえば，イタリア中部山村では，妊娠，出産，授乳，搾乳にかかわる弁別特徴によって成熟メスが細分化されている [谷　1976: 37]。これらの弁別特徴は，同一個体に対してサイクリックにおとずれるものであるから，当然ながら，これらの類別名

称も同一個体に対してサイクリックにあたえられるという特徴を有している。これに対して，モンゴルでは，まず第一に，乳利用をめぐるそれほど精密な細分化はないといってよい。第二に，成熟メスをあらわす類別名称は，どの家畜種においても通常は経産メスを意味している。いわば，成熟とは出産を経験したことと同義になっているのである。第三に，成熟可能な年齢段階に達したものの，いまだ出産を経験していないメスあるいは初めて妊娠しているメスを表現する類別名称が存在する。たとえば，ウマの場合はバイダス *baidas* である。モンゴルにみられるこの細分には，弁別基準として年齢という段階がふくまれており，それゆえにサイクリックではありえない。さらに，家畜種をとわず，ホスラン *xusran* という類別名称も存在する。これは，次の妊娠がないために乳がいつまでも出つづける状態をさす。すなわち，懐妊していないという状態がチェックされているわけである。もちろん，このホスランの状態も乳の利用と密接にかかわった弁別基準ではあるものの，搾乳作業にかかわるサイクリックな類別名称ではない。その意味で，乳利用に主眼をおいた作業暦上の精密な細分はモンゴルにはみられない，といってよいであろう。

また，搾乳をめぐる儀礼においてみとめられる対比的な差異は，さらに自然認識全体の差異にもかかわってくるであろう。たとえば，搾取および資本と対応する牧畜関係の語彙を比較すると興味深い。ヨーロッパでは，milking（搾乳）が搾取と対応し，資本には livestock（家畜の生体）が対応する。また，capital はとくにヒツジの頭と関係し，さらに cattle と同源であることも，資本と生体の対応としてみとめられる [山下　1974: 69]。これに対してモンゴルでは，搾取をモシギフ *mosigix* といって，肉をきれいに食べることを原義とする語彙で，骨までしゃぶるというような意味に由来している。また，資本をホロンゴ *köröngö* といい，この原義は乳製品加工における酵母（乳酸菌）を意味している。モンゴルでは，肉が搾取と，乳が資本と対応している。このように，肉と乳をめぐって搾取と資本の関係は，モンゴルとヨーロッパではちょうどさかさまになっているのである。たとえ，それがレトリック上の偶然であるにせよ，この偶然を可能にするだけの技術的基盤とそれに呼応する思想的基盤とがあり，体系としての総体が異なっていると仮定するのは，あながち無謀ではあるまい。

こうして考察をひろげていくと，「牧畜は，家畜を殺さずに乳を利子として利用する生業である」といったこれまでの簡単な定義は，今後の牧畜論ないしは遊牧論においてもはやこのままでは通用しないであろう。単に，アンデス地域の牧畜や一部のトナカイ放牧のように乳を利用しない牧畜世界もあるという事実からだけではなく，乳を利用する世界を考慮するうえでも，乳利用と密接にむすびつく他の要素が全体とし

てかかわりながら異なった世界が存在するからである。また，事実として家畜の殺しは必要であり [小長谷　1991a]，殺しをめぐってその対象や方法に明瞭な差異もまた存在するのであるから，家畜の屠殺あるいは肉利用を無視することはできないはずである。

このような展望のもとに，モンゴルの搾乳儀礼をさらに牧畜に関連する他の諸儀礼たとえば去勢儀礼や屠殺儀礼，ダルラガとよばれる招福儀礼などと関連づけつつ，そのサイクルのなかで考察する余地が残されている。これを筆者自身の今後の課題としたい。

## 文　　献


ACCOLAS, J. -P. et F. AUBIN
1975 Les Produits Laitiers. *Etudes Mongoles* 6: 55–83.

AKADEMIYA NAUK S. S. S. R.
1963 *Narody Srednii Azii i Kazaxstana II.* Moskva.
（ロシア文『中央アジアとカザフスタンの諸民族』）

ARIYASUREN, CH.
1991 *Mongol Yos Zanshlyn Dund Tailbar Toli.*
（モンゴル文『モンゴル習慣の中事典』）

AUBIN, F.
1986 L'Arte du Cheval en Mongolie. *Production Pastorale et Societe* 19: 129–149.

BADAMXATAN, S.
1965 *Köbsgölin Darxad Yastan.* Ulaanbaatar.
（モンゴル文『ホブスグル地方のダルハト族』）

チムドドルジ
1989 「モンゴルの乳製品」利光有紀訳『民博通信』45: 37–47。

DAMDYNSURUNG, Ts.
1959 *Mongol Uran Jokiyal-un Degeji Jigun Bilig Orosibai.* Ulaanbaatar.
（モンゴル文『モンゴル文学百選』）

DASHNIYAM, U.
1977 B. Sharavyn negen juragiin tuxai. *Muzei Sudlal* III: 44–56, Ulaanbaatar.

ドーソン
1965 『中央アジア・蒙古旅行記—カルピニ／ルブルク』護雅夫訳注　桃源社。

ドーソン
1971 『モンゴル帝国史 3』佐口透訳注　東洋文庫189　平凡社。

DZAMTSARANO
1961 Kulit Cingiska b Ordos iz Puteshestbiya b Yujnuyu Mongoliyu b 1919. *Central Asiatic Journal* 6: 194–234.
（ロシア文「オルドスにおけるチンギス崇拝—1919年の南モンゴル旅行から」）

GAADAMBA, M. and D. TSERENSODNOM (eds.)
1967 *Mongol Ardyn Aman Zoxiolyn Deej Bichig.* Ulaanbaatar.
（モンゴル文『モンゴル口承文芸の粋』）

GEORGI, J. G.
1775 *Bermerkungen auf einer Reise im Russischen reishe in den Jahren 1773 und 1774.* I. St. Petersburg.

後藤富雄

1968 『内陸アジア遊牧民社会の研究』吉川弘文館。
HALTOD, M.
1966 *Mongolische Ortsnamen aus Mongolischen Manuskript-Karten* Teil 1. Wiesbaden.
ハルヴァ，ウノ
1971 『シャマニズム—アルタイ系諸民族の世界像』田中克彦訳　三省堂。
蓮見治雄
1979 「モンゴルのしきたりと馬—婚姻と遊牧をめぐる儀礼」『季刊民族学』7: 114–122。
1980 「史記匈奴列伝中の一記事について—モンゴル語及びモンゴル口承文芸から見た解釈の可能性」『東京外国語大学80周年記念論文集』pp. 283–296。
HEISSIG, W.
1966 *Mongolische Volksreligiose und Folkloristische Texte*. Wiesbaden.
HUMPHREY, C.
1981 Text and Ritual for the Libation of Mare's Milk. *Journal of the Anglo Mongolian Society* 7: 78–96.
伊東一郎
1988 「聖ゲオルギウスの変容」青木保・黒田悦子編『儀礼—文化と形式的行動』東京大学出版会，pp. 214–235。
JUKOVSKAYA, N. L.
1988 *Kategorii i Simbolika Tradicionnoi Kylityri Mongolov*. Moskva.
（ロシア文『モンゴル伝統文化におけるカテゴリーとシンボル』）
小長谷有紀
1991a 「モンゴルの家畜屠殺をめぐる儀礼」畑中幸子・原山煌編『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会，pp. 303–333。
1991b 『モンゴルの春』河出書房新社。
1991c 「天然健康ドリンク剤，馬乳酒は百薬の長」『季刊民族学』56: 56–57。
ポーロ，マルコ
1970 『東方見聞録1』愛宕松男訳注　東洋文庫158　平凡社。
松原正毅
1983 『遊牧の世界—トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』（上）（下）　中公新書683　中央公論社。
松井　健
1980 『パシュトン遊牧民の牧畜生活』京都大学人文科学研究所調査報告第33号。
みやこうせい
1988 『羊と樅の木の歌—ルーマニア農牧民の生活誌』朝日選書362　朝日新聞社。
MOSTAERT, A.
1956 Materiaux Ethnographiques Relatifs aux Mongols Ordos. *Central Asiatic Journal* 2: 241–294.
村上正二（訳注）
1970 『モンゴル秘史1』東洋文庫163　平凡社。
中江利孝
1976 「モンゴルの牧畜と乳製品」『日本モンゴル学会会報』（モンゴル学術調査中間報告）：9–17。
1977 「モンゴルの乳と乳製品について」『日本モンゴル学会会報』8: 23–29。
NATSAGDORDZ, SH.
1968 *To Ban Tüünii Surgaal*. Ulaanbaatar.
（モンゴル文『ト・ワンの教え』）
NIYAMBUU, X.
1976 *Onoogiin Mongol Yos*. Ulaanbaatar.
越智猛夫
1991a 「モンゴル共和国の牧畜について（その1）」『酪農科学・食品の研究』40(1)：A23–A32。
1991b 「モンゴル共和国の牧畜について（その2）」『酪農科学・食品の研究』40(2)：A91–101。

ODBAGMAD, Z.
1986 *Mongol Arad-un Kündülek, Mendülek, Talaraxax Yoso.*
(内蒙古転写本『蒙古族的伝統礼節』)，内蒙古教育出版社，呼和浩特。
RINTCHEN, B.
1959 *Les Materiaux pour L'Etude du Chamanisme Mongol.* Asitische Forschungen 3, Wiesbaden.
SAINJIRGAL, Saraldai, Jorigto
1983 *Altan Ordon-u Tayilag-a.*
(モンゴル文『成吉思汗祭典』)，民族出版社，呼和浩特。
SAMBUU, DZ.
1966 *Mongol Orny Bilcheeriin Mal Mallagaanii Arga Turshilaga.* Ulaanbaatar.
(モンゴル文『モンゴル国の牧畜経験』)
SAMPILDENDEV, X.
1985 *Malchin Ardyn Zan Üiliin Ulamjilal.* Ulaanbaatar.
(モンゴル文『牧民の伝統的な習慣』)
1987 *Mongol Ardyn Zan Üiliin Aman Zoxiol.* Ulaanbaatar.
(モンゴル文『モンゴルの習慣にみられる口承文芸』)
SERRUYS, H.
1974 *Kumiss Ceremonies and Horse Races—Three Mongolian Texts.* Asiatische Forschungen 37, Wiesbaden.
SHAHRANI, M. NAZIF, MOHIB
1979 *The Kirgis and Wakhi of Afganistan.* University of Washington Press.
SODONOM, Ts.
1965 Güünii Ürüs Gargax Yos. *Studia Etnographica* 2 (15) : 29–40.
(モンゴル文「メスウマのウルス（子孫）を出すしきたり」)
SONJAB and SUCINBILIG (ed.)
1989 *Alagshan Jan Agali.*
(モンゴル文『阿拉善風俗志』)，内蒙古人民出版社，呼和浩特。
田中克彦
1977 「モンゴルにおける乳製品を表わす語彙について」『一橋論叢』77 (3) : 279–300。
谷　泰
1976 「牧畜文化考—牧夫-牧畜家畜関係行動とそのメタファー」『人文学報』42: 1–58。
1984 『「聖書」世界の構成論理』岩波書店。
TAUBE, ERIKA und MANFRED
1983 *Schamanen und Rhapsoden—Die Geiseige Kulture der Alten Mongolei.* Wien.
友枝啓泰
1986 『雄牛とコンドル』岩波書店。
利光有紀
1984 「モンゴルにおける乳製品の製法体系」『季刊人類学』15 (3) : 216–262。
1989 「春のチンギス・ハン祭典」『季刊民族学』48: 36–48。
TSULTEM, N.
1986 *Mongol Zurag*, Ulaanbaatar.
内田敦之
1987 「モンゴルにおける人と馬の関係について」大阪外国語大学編『モンゴル研究』10: 39–50。
梅棹忠夫
1950 「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅰ—序論，および乳しぼりの対象となる家畜の種類について」自然史学会編『自然と文化』Ⅰ: 187–214。
1951 「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅱ—乳のしぼり方，およびそれと放牧との関係」自然史学会編『自然と文化』Ⅱ: 119–172。
1952 「モンゴルの飲みものについて」ユーラシア学会編『遊牧民族の社会と文化—ユーラシア学会研究報告』(『自然と文化』別編) pp. 177–200。
1955 「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ—モンゴルの乳製品とその製造法」ユーラシア学会編

『内陸アジアの研究—ヘディン博士記念号』pp. 217–296。
1965 「狩猟と遊牧の世界（下）」『思想』4月号: 66–88。
VAINSHTEIN, S.
1980 *Nomads of South Siberia.* M. Colenso, trans., Cambridge University Press.
XORLOO, P.
1966 *Mongol Ardyn Yorool.* Ulaanbaatar.
（モンゴル文『モンゴル人民の祝詞』）
XORTSABAGATOR
1987 Xatagin Arban Gurban Atag-a Tngri-yin tayilg-a.
（モンゴル文『ハタギン13家神祭祀』），内蒙古文化出版局，海拉爾。
山下正男
1974 『動物と西欧思想』中公新書347　中央公論社。
吉田順一
1983 「モンゴルの肉食」『月刊百科』252: 15–18。